

さて私たちは説教、すなわち説教者と説教の研究の新しい局面にはいるうとしています。これまで私たちは教会の礼拝で説教者が講壇に立って説教するとき、何が起きるかを考察しました。そこが出発点でした。そして実際何かが起きているという事実から、説教とは何なのか、それを語る者の準備は何かを概観してきました。

そこで私たちはその事柄の異なった面に目を向けようとしています。これまで説教の問題に対するアプローチは総括的でしたが、ここでは説教者が実際どのように毎週この準備をするかという特定の問題を取り上げます。主題全体についての大まかな区分は明瞭だと確信していますが、こうした重要な問題を考察するときは、個々の事柄を扱う前に、まず全体に対する明瞭で正しい理解が必要です。今、私たちはその点に到達しているので、自分の召命を感じ、説教の奉仕を行う準備をしている人について考察します。

では彼はどのように準備するのでしょうか。準備の過程は何でしょうか。私はいつでも準備

をすること、これを第一の根本条件と定めたいのです。私は文字通りそうだと言っています。かと言っていつも机に座っていることではありません。でもいつも準備をしているのです。霊的な領域では休日はないというのが真実であるように、同じ意味で私は説教者には休日はないといつも感じています。確かに日常の仕事から離れ休暇のときはありますが、召命の性質と特性からも、自分の働きから解放されることはありません。それで彼の行動のすべて、身の回りに起ることまた説教の働きに関係すると考えられるすべての事柄がその準備の一部となります。

そこである特定の題材に取り組むとき、説教者の第一にもっとも重要な責務はメッセージの準備ではなく、自分自身を備えることです。この働きの経験のある人ならだれでも、このことに心から同意できるでしょう。それは経験によって覚えることです。最初、大切なのはメッセージ——これはほんとうに注意深い準備が必要です——を準備することだと考えがちです。しかし、何と言っても説教者自身の準備が一番大切です。

ある意味で説教者はいかなる人です。過去にはジョン・ウエスレーのように「一書のみ」と言った人々がいます。一般的に言ってそうですが、説教者の場合にはなおさらいちぢな人間と言えます。彼が召されたのもこの働きのためです。人生の熱情をただその一事に傾けるからです。

ではこのことについて何をやるのでしょうか。まず大切な規則は、自分の生活において原則的な事柄を維持するようよく注意を払うことです。つまり教職者の生活には多くの危険があり

ます。普通の職業や仕事と異なり彼には執務時間やさまざまの慣例、それに外部で決定される事柄に拘束されません。彼らと比較してみると説教者は自分自身の主人です。むしろ人間関係のことを言っています。神との関係では彼は自分自身の主人ではありません。しかし、教職者の生活とほかの大部分の人たちの生活との間にはこのような明確な相違があります。それにさまざまの事柄が彼には託されているので、非常に特異ですが、幾つか直面する深刻な危険と誘惑があることに気づかなければなりません。その一つは時間を無為に過してしまふ危険です。特に午前の時間がそうです。まず新聞から始まって、まったく無意識のうちに多くの時間を費やします。次には週刊誌や文芸誌などがあり、その間にしばしば電話がはいるという具合です。家であれ教会の執務室であれ、午前の時間はすぐに去って行きます。それで私が常々感じ、また年々その感を強くしていますが、説教者にとって重要な規則の一つは午前を確保しなければならぬことです。これを絶対的な規則としてください。午前は電話を使えなくする方策を考えてみてください。たとえば奥さんかほかの人が代って伝言を受け取り、自分は電話に出られない旨を相手に伝えてもらうのです。この意味で自分の生活のために戦わなければなりません。それにしても書齋での午前の仕事が緊急性のない電話で何としばしば中断されることでしょうか。ときには二年後の説教の予約のこともあります。こうしたことはよく起りますが、その状況に対処するには二つの方法があります。一つはその用件をじっくり考えられるよう相手に

手紙を書いてもらうことです。第二の方法はもっと効果的ですが、午前中は直接電話に出ないで、「もう一度、何時に電話をしてほしい」と伝言してもらうことです。午前の仕事を終えた昼食時やほかの時間にです。そのような中断はほんとうに悪いものです。このことでよいことがあるとすれば、聖別の点で助けとなることくらいでしょうか。教会の用件であってもこれを妨げてはなりません。自分の午前を確保してください。午前は講壇での働きのために備えるというこの重大な責務に明け渡されていなければなりません。

ここで私にとって大事なことを一言付け加えます。でもだれもが受け入れられることでないかも知れません。つまり何事にも万人共通でしゃくしような規則を当てはめるのに私は反対します。自分自身を知ること以上に重要なことはありません。それは性格やそのほかの点と同様、肉体面でも自分を知ることを含みます。なぜこんなことを述べるかと言えば、よく説教者や教職者に対して一つの計画表を規定する人たちがいるからです。朝は何時に起床し、朝食前には何を、その後では何を、などとして押しつけます。臆面もなく彼らはさまざまの方式や計画を作成し、それらを提唱します。もしその計画を守らないなら、罪人か敗北者だと言わんばかりです。しかし、前述の理由から私はそうした考えに反対してきました。私たちは一人一人違います。このような性格を持つ計画はどの人にも規定できるものではありません。

そこでこの点を例証しましょう。私たちは肉体にあつて生きていますが、肉体には個人差が

因が関係しています。ですから私たちはまず自分自身を知り、その独特の体質でどう仕事をしたら良いかを知ることから始めなくてはなりません。自分の最良の時間を知って、そこから自分の身体をどう処するかを知ってください。それができるなら、だれからも機械的に規則を押しつけられたり、仕事のやり方や一日の区切をどうつけるかについて指図を受けることはありません。そこで自分独自の計画を作成してください。いつ最良の仕事ができるかはあなた自身を知っているからです。そこでもし自分に合った計画を立てないで、机に座って——さまざまの規定や規則に従い——、二、三時間書物を開いて読み進んでも、実質的に何も吸収していないとすぐに気づくでしょう。ところがあなたは遅い時刻の三十分で、午前の二時間で行うよりもずっと多くのことができるかも知れません。私が言わんとするのはこのことです。

以上のことからこの規律の問題は、実に本人自身の問題です。だれも彼にどうすべきだと命じることはできません。もし彼があるべき自分になるには、すなわち、神の栄光のために仕え、魂の薫陶と救いに関心を持つ霊的な心の説教者となるには、自分はこうしなければならぬのだと気づくなら、それですべてが決ります。それが彼にその規律を実行させてくれるのです。もし彼が正しい動機と目的を持ち、真に召命を受けているなら自分の働きを一番効果的に行いたいと切望し、自分自身と一日の時間をどう最善に整え配分したら良いのかと、これを見出すのに労を惜しまないでしょう。私はこれまで自分に適さない方法を採用して困難に陥っ

あります。それに気性や性質も異なっています。ですから普遍的な規則を決めることはできません。栄養学から一つの例を引用しましょう。これはいつも多くの議論を呼ぶ事柄です。つまり何を食べ、どんな規定食を摂取したら良いかということです。だれにでも当てはまる規定食を作り出しては、それを提唱する人がいつでもいます。どの人もその規定食を行うべきで、もしそれを続けるなら、障害はなくなると言うのです。ところがそうした事柄に対する最終的な答えが一つあります。栄養学の第一原則は、「ジャック・スプラットは脂肪を食べられない。しかし、妻は脂肪のない肉は食べられない」ことだと私は断定します。これは紛れもない事実だからです。ジャック・スプラットはそんな体質になっていたので脂肪を消化できなかったのです。それは彼が自分で決めたのではなく、生れつきそうなのです。これは人間が決定できない身体の新陳代謝の問題です。ところが妻はまったく違っていました。彼女は赤肉を消化できないのですが、脂肪から栄養を摂取したのです。それでジャック・スプラットと妻に共通する規定食を決めようとするのはまったくナンセンスなことです。

同じ原則がより高い領域の事柄にも適用されます。私たちの中には午前は思うようにエンジンのかからない人もいれば、朝はすっきりと目覚め、皮ひもでつながれた犬のように、仕事に取りかかろうと、エネルギーにあふれている人もいます。これは私たちが決定できないことです。体質的な事柄だからです。部分的には血圧、神経組織、内分泌腺のバランスなど多くの要

てしまった多くの人を知っています。



次の主題に移りますが、私はこれには全然自信がありません。扱うのにひどくためらいを感じ、まったくふさわしくないという意識を持っています。私たちはみな何よりも次の点で失敗すると思うのですが、それは祈りです。祈りは説教者の生活にとって生死にかかわるものです。幾世紀にもわたるもつとも偉大な説教者の伝記や自叙伝を読むと、常にこの祈りが彼らの生活のすぐれた特徴となっているのが分ります。彼らは常にすぐれた祈りの人でした。祈りに時間を費やしたのです。多くの例を引用できますが、それらはよく知られているので触れません。この人たちは祈りが絶対不可欠であることを祈りを継続することによって発見したのです。

しかし、私はこの主題を扱うのにもためらいを感じます。自分が扱う聖書箇所には祈りがあるときは、それについて説教しましたが、祈りに関する本はもちろん小冊子さえ出版しようなどと考えたことはありません。ある人々は機械的に祈りを取り扱い、その種々異なる面を捉えて分類するので、たいへん単純なことに思われます。しかし、祈りは単純なことではありません。もちろん、祈りには訓練の要素はありますが、祈りということの性質上、そのように取り扱うことはできません。つまり私が言いたいことは——再度私の個人的な経験からで

すが——、祈りの場合にも自分自身を知ることはいへん重要であることです。深い霊性が自分に欠如しているせいかどうか分りませんが——自分ではそうだと思いませんが——、率直に告白して私はしばしば朝祈ることに困難を感じてきました。

そこで個人的な祈りに関して幾つかの事柄を学びます。命じられてひざまずくことはできても、祈りは命じられてもできません。ではどう祈るのでしょうか。祈れる環境や状態に自分を置くことを覚える、私はこのことほど重要なことではないと分りました。祈りをどう始めるかを学ばなければなりません。自分自身を知ることがまさにこの点でもたいへん重要です。まず一般的にデボーションナルなものを読むことはとても価値があります。デボーションナルという語は感情的なことではなく、そこに真の礼拝的要素があることを意味します。だからと言って祈るときはいつでもみことばを読んで始めなさいというのではありません。そのことにも困難を感じるときがあるからです。自分の霊性を励ましてくれるようなものを読んでください。自分の霊のうちに冷たさを追い払い、内にある霊の炎を燃え立たせ、元気づけてから祈り始めることを学ばなければなりません。これは寒いときに車を動かすのに似ています。霊的なチャークの使い方を覚えなくてはなりません。これから得ることは非常に多く、私は徒労に終わったことはありません。祈れない状態にあるなら、無理に祈るのはしばらくやめて、自分を元気づけ励ましてくれるものを読んでください。そうすればもつと自由に祈れる状態になるでしょう。

しかし、私は書齋で仕事を始める朝のひと時に祈るような束の間の祈りで充分だと言っているではありません。むしろその逆です。祈りは一日中続けられるべきです。祈りは必ずしも長くなくて良いのです。とっさの叫び声もときには真の祈りであるように、短くても良いのです。それがテサロニケ人への手紙第一、五章一七節でパウロが、「絶えず祈りなさい」と勧告していることです。それは絶えずひざまずきなさいというのではなく、常に祈れる状態に自分を置きなさいということです。道を歩いていたり、書齋で仕事をしているときでも、祈りによって自分をたびたび神に向けることなのです。

とりわけ祈りたい衝動に駆られた場合には——私はこのことを何よりも重要だと考えますが——、必ずそれに応答してください。この衝動は読書のときやみことばと取り組んでいるときに起きるかも知れませんが、私はこれを一つの絶対的な規則と定めたのです——祈りの衝動には常に従いなさい。ではその衝動はどこから生じるのでしょうか。これは聖霊のみわざです。それは「恐れおののいて自分の救いを達成してください。神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです」(ペリピニ・一一、一三三)と語られていることにあります。これはしばしば教職者の生活でもっとも際立った経験に導いてくれます。ですから決して祈りの衝動に逆らったり、延期したり、忙しいことを理由に退けてはいけません。それに自分を従わせ、明け渡しなさい。そうすればあなたの取り組んでいる

事柄にとつても時間の浪費ではなく、むしろ実際に大いに助けとなるのが分るでしょう。読んでいる事柄を理解するにも、思索したり、説教を整え、書きものをするにも、すべてに落ち着きと容易さを経験するでしょう。実に驚くべきことです。ですからそのような祈りへの招きを決して気を紛らわせることだと考えないで、いつでも直ちに応答してください。もしそれが頻繁に起きるならむしろ神に感謝してください。

どの観点からも教職者や説教者は祈りの人でなければなりません。これは牧会書簡やほかの聖書箇所です。絶えず強調されています。しかも私が述べてきたように、長い教会の歴史の中で豊富に確証されているのです。著名な説教者の生活においては特にそうです。ジョン・ウエズレーは毎日四時間祈らない人など考えられないうまく言いました。ブレイナードやジョン・サンプソン・エドワーズ、ロバート・マレー・マックシェーンや大勢の聖徒の生活でも、祈りはどんなことより際立っていました。このような人たちの物語を読むとほんとうに謙遜にさせられます。

✱

✱

さて説教者の生活でその次に絶対必要な事柄——聖書を読むこと——に移ります。明らかにこれは説教者が毎日規則的に行っていることです。ただ私がここで忠告しておきたい点は、聖書を体系的に読みなさいということです。行き当りばつたり読むのは危険です。それは自分

の好きな箇所を読むことになり、聖書全体を読まないことになるからです。聖書全体を読むことの肝要さはいくら強調してもし過ぎることはありません。それですべての説教者は少なくとも毎年一回聖書全体を完全に通読すべきです。そのためには自分なりの方法を工夫したり、ほかの人が工夫した方法を用いることもできるでしょう。私は自分の奉仕の初期に、自分と教会員とのためにこの計画を詳細に作成した後でロバート・マーレー・マックシェーンがダンディーにある彼の教会の会員のために作成した計画に巡り合ったことを覚えています。それはアン・ドリユー・ボナーが書いた彼の伝記の中にありました。マックシェーンの計画によると、毎日四章読みます。そうすれば毎年旧約聖書は一度読み通し、詩篇と新約聖書は二度読むことになります。現代の多くの方法と異なり、彼は小さな段落やあちこちから幾つか節や章節を抜粋し、何年かかけて聖書全体を通読するようなことはしませんでした。それだときにはある章節を抜かすことがあるからです。彼の計画の目的はどこも抜かすことなく毎年人々に聖書全体を通読させることでした。これは説教者にとっても聖書を読む最低限のことであるはずです。

私はこのことが何よりも重要な事柄の一つだと分りました。それでまずあなたはそれを行ってから、自分で自由に注解書や参考書などを用いて特定の聖書箇所に取り組んだら良いのです。以上私は一般的な聖書の読み方について述べました。次にある特定の箇所でも、読んできた書の一章でも、それをできる限り多くの参考書や原語の知識やそのほか何でも用いて、詳しく

く注意深く研究するようにしてください。

さらに次のことを特に強調したいと思います。説教者が陥るもつとも致命的な悪習の一つは聖書をただメッセージの箇所を見つけるために読むことです。この危険は現実にあるので、これには何としても戦い抵抗しなければなりません。聖書を読むのはメッセージの箇所を見つけるためではなく、神があなたの魂に供給してくださる食物であり、神のことばであり、神を知る手段であるからです。聖書はいのちのパンで、あなたの魂の滋養と安寧のために備えられたマナだから読んでほしいのです。

ですから説教者はメッセージの箇所を見つけるために聖書を読んではいけません。しかし、体系的に読んでいて——実際すべてのクリスチャンがそうすべきですが——突然、ある聖書箇所が強く迫って心を打ち、語りかけて、直ちに一つのメッセージが示されることがあるのです。

そこで説教者としての生活で、多くの点からもつとも重要な発見だと考えている事柄について話しましょう。私は自分でそれを発見しなければなりませんでしたが、紹介してあげた人はいつもとたいへん感謝されました。それは聖書を読んでいるとき——読む量は問題ではありませんが——ある節が迫ってあなたの心を打ち、あなたを捉えるなら、そこから読み進まないようにすることです。読むのをやめてすぐにそれに耳を傾けてください。そのみことばはあなたに話しかけているのですから、耳を傾けてそれに応答してください。読むのをやめたら聞

置かないでその衝動を与えた聖書の記事に取り組み、メッセージの骨組ができるまでそれを続けてほしいのです。その節や聖書の記事があなたに語りかけてメッセージを示してくれたからです。ただ危険なことは「確かにこれはすばらしい。そこを覚えておこう」と考えて読み進んでしまうことです。ところが週末になってもまだ日曜日のためのメッセージも聖書箇所も決らず、「先日の箇所はどこだったろう。そうだ、あの箇所だ」とそこへ戻るのですが、驚いたことにもうそこから何も聞くことができず、そのメッセージを取り戻すことができないのです。衝動を与えられたらいつでもそこでやめてメッセージの骨組を作り出さないと勧める理由がそこにあるのです。しかも、紙にそれを書き留めるようにしてください。

何年間も私は机の上でもポケットの中でも、聖書を読むときは必ずメモ用紙を用意してきました。そして私の心を打ち、捉えることがあればすぐにメモ用紙を取り出します。説教者はリスのように、これから来る冬の日々のために素材を収集、貯蔵する方法を学ばなければなりません。ただ骨組を作り出すだけでなく、書き留めておかなければなりません。そうしなければ、思い出せなくなるでしょう。後になると実際思い出せないのです。ここに含まれる原則は試験の際に適用される原則とまったく同じです。だれでも座って講義を聞いている間は「さあ、もう分ったぞ」と思いますが、いざ試験場に行つて、それに関する問題に答えようとする時、あまり覚えていないことに気づきます。知っていると思つていたのに、そうではなかった

のです。そこで規則とすべきことは、何でもあなたの心を打つものは書き留めておくことです。その結果、たくさんのメッセージの骨組を蓄積し、ほんとうに豊かになるでしょう。

私は土曜日になつてもまだ日曜日のための聖書箇所やメッセージがなく、反狂乱に陥り、必死になつている教職者を知っています。それは彼らが私の提唱することを実行しないからです。教職者の生活で何よりも大切なことを抜き出すとすれば、実際面ではそのことがもつとも大切です。夏の休暇に出かける直前に、私は積み重ねてあつたたたくさんのアウトラインに目を通していたところ、偶然にも同じ主題について十個のアウトラインがあることに気づきました。そこでそれらを順序よく並べてみると、休暇から帰るまでに準備しなければならぬ十回の連続説教ができ上がったのです。ある意味で休暇を取る必要がなくなつてしまつたわけです。

続いて「デボーション用の読み物」について触れます——この言葉は乱用されているので好きではありませんが、ほかに適切な言葉を思いつかないのです。これは、いわゆるデボーションナルな注釈という意味ではありません。私は「デボーション」のための注釈は大嫌いです。自分のデボーションをほかの人に代つてしてほしいとは思わないからです。しかし、もつとふさわしい言葉が思いつかないのです。ただ私の考えている読み物は、一般に聖書を理解し楽しむのを助け、また講壇の奉仕のために自分を整えるのに助けとなるものです。それは聖書の次に大切な読み物です。それは何でしょうか。私はためらわず、ピューリタンに関する書物を挙げ

ます。これこそ私たちに益をもたらすものです。彼らは説教者でしたが、実際的で経験があり、人々に対する牧会的な関心と配慮を持つ説教者でした。ですから彼らに関するものを読むとき、知識や情報を与えられるだけでなく、何らかの益をもたらしてくれるでしょう。再度強調したいことは、説教者は一般的な意味で自分を知るだけでなく、自己特有の気分や状態、状況をも知らなければならぬということです。説教者は決して気持ちにむらがあつてはなりません。でもさまざまな気分になることがあります。明朝どんな気分であるかだれにも分りません。それは制御できないことです。私たちの働きはこの変りやすい気分に対して何かを行うことですから、私たち自身がその犠牲となつてはいけません。一日としてまったく同じ日を過すことはないし、自分自身の移り変わる状態に応じて身を処していかなければならないのです。ですからこうした変化する状態の中で、自分にとって何がもつとも適切な読み物であるかを発見しなければなりません。

一般的にピューリタンのものは間違いなく助けとなります。これを過度に強調してはいけません、このようなピューリタンが実に多くいます。一般的にジョン・オーウェン（一六一六—一六八三）のものは難解ですが、彼は高い知性の持ち主でした。しかし、もつと温かで直接的で、経験の深いピューリタンの著者もいました。その一人、リチャード・シップスという人には私はいつも感謝しています。過労でひどく疲れ、異常な方法で悪魔の猛攻にさらされていた

時期に、彼は私の魂に香ばしい油となってくれました。そのような状態や状況のときに神学を読んでも役に立ちません。実際読めません。あなたが必要とするのは穏やかに、優しく魂を扱ってくれるものです。そのときの私には、十七世紀初頭にロンドンで「天国の医者シップス」として知られていたリチャード・シップスが確実に効きました。彼の著書『痛んだ葦』や『魂の闘い』は私の気持ちを落ち着かせ、なだめ、慰めと励ましを与えて癒してくれました。自分の霊的な生活がこのようにどうしても経なければならぬさまざまな局面に突き当たったとき、自分に適用できるふさわしい療法を知らない説教者は気の毒です。

論理的なものを見方をする人たちにはこのようなことは奇妙で、間違いだと思えるかも知れません。しかし、それは教職の経験がなく、その問題や気遣いや試練について知らないからです。使徒パウロは「外には戦い、うちには恐れがある」ことを経験するのがどんなことか知っていました。彼は「気落ち」し、「激しい戦い」や苦闘のただ中にいることの何たるかを知っていたのです。この職分にあずかる教職者であるなら、これは必ず知っておくべきことです。「すべての教会への心づかい」とパウロはほかの所で述べていますが、このようなさまざまな要因——人々に関する問題、自分自身の問題、それに肉体的状態や状況——が霊的経験の過程でこの種の多様性を持つようになるのです。これも何世紀にもわたり、聖徒たちが証しているところですからこのような変化をまったく知らないというクリスチャンを私は信

用しないことにしています。「だって私は一日中幸せ」という合唱曲がありますが、私はそんなことを信じません。ほんとうではないからです。悲しいときもあります。ですから魂がそのような状態や状況にあるなら、それを扱って処理する方法が早く習得されれば、それだけあなたにもあなたの説教を聞く人々にも良いのです。

この章の主題にかかわる事柄として、メッセージを読むことに触れておきます。このことには注意を払わなくてはなりません。実に多くのメッセージがありますが、いつ出版されたものであるかが大切だとすでに指摘しました。私の働きの初期の頃、ジョン・サン・エドワーズのメッセージを読んで、それから得た助けは私の経験では計り知れないと証言できます。もちろんそのメッセージだけでなく、十八世紀にアメリカで起きた霊的大覚醒のあの偉大な信仰復興に關する彼の記事やそのすぐれた著書、『敬虔な愛』からも得ました。エドワーズは魂の状態や状況を扱う専門家でしたので、それらはこの上なく貴重でした。彼は霊的体験のさまざまな局面を経ている人々に起きる牧会上の諸問題を実際的方法で取り扱いました。これは説教者にとって計り知れない価値があります。こういうわけで説教者は自分の読む物を賢明に選択しなければなりません。それは自分の魂のためだけでなく、ほかの人たちを読むことでも助けてあげるためです。間違ったタイプの本——それらは人々をむしろ悪くします——を勧めると、しばしば多くの弊害が出てきます。たとえば多少憂うつ症になっている人が病的で内省的な傾向

にあるとき、その人に罪の悔い改めや霊的な覚醒ないしは警告をおもな目的とする本を与えるなら、あなたは彼に大変なダメージを与えかねません。彼の必要とするのはむしろ、その状態の彼を励まし、積極的に指導してあげることです。この逆の場合も同じです。あなたは自分のためだけでなく、ほかの人々のためにも何を読むべきかを知る必要があります。メッセージを読むことに関しては以上にします。読むべき物がたくさんあっても、実際説教者にとって読書の時間を見つけるのは至難のことです。これにはいつも闘いがあります。

読書の時間を見つけるようにと言いましたが、ここでもっと知的な読書に触れます。まず神学から始めましょう。神学校を卒業すると神学を修了したと考えることほど大きな誤りはありません。説教者は生きている限り、神学書を読み続けるべきです。しかも多く読むに越したことはありません。学ぶべき多くの著書や異なった体系があるからです。訓練を終えると同時に読むのをやめてしまう教職者や別の人生を歩む人がいますが、彼らは自分たちの必要とすることとはすべて習得したと考えています。講義ノートがあるので、それ以上何も必要としないのです。その結果彼らは無為単調な生活をして、まったく役に立たなくなってしまうのです。読み続けてください。しかもすぐれた著作をです。その理由はたくさんありますが、後で触れます。

さて、ここで再び説教者の訓練を考察した際に強調した点——教会史を読むことの重要性——に戻ります。これをただ試験のために学ぶ主題と見てはいけません。それは学生より説教

者にとつてはるかに大きな価値があります。それに説教者はいつも大きな出来事を覚えている必要があります。神の人たち——ホイットフィールドやウェスレー兄弟など——、特に説教者として大いに用いられた人々の伝記や記録も読み続けるべきです。是非そうしてください。それには決して終りはなく、この方針に沿って読むなら、あなたはさらに整えられるでしょう。すべてこれは説教者の備えという主題に属していることを忘れないでください。

次に弁証的な読み物を挙げます。その理由として神学と哲学には流行があるからです。それは現れては消え去ります。しかし、こうした事柄を知っておくのも説教者の務めなので、その幾つかは読まなければならないでしょう。しかし、途方もなく多くあつて、とても全部は読みきれません。さらに科学に関連するさまざまな論題があります。そこでは科学は信仰と聖書の教えとに対立するように思われるので、これは熟慮すべき問題です。もちろん心理学もあり、そこにも特に信仰に対して微妙な攻撃があります。

さて、どの人もすべての事柄について専門家となるわけにはいきませんが、時代に遅れないよう、こうした事柄ではできるだけ時代について行くべきです。現在何が起きているかを知るためにも、こうした事柄に関する書物を読まなければなりません。これまでおもに書物について考えましたが、雑誌や定期刊行物もあります。自分の教派に属するものばかりでなく、特に最近のようにエキキュニカル運動の盛んな時代では、ほかの教派のものでこの働きにかかわる

出版物もあります。すべてこうしたものは、説教者が彼の聴衆を評価する際の助けとなるので必要です。説教者は人々の背景やものの見方、また彼らは何を考へ何を読んでいるか、そして彼らにかかわる種々の影響力について知っていなければなりません。単純で思慮深くない人々となら何でも信じようとしません。ですから彼らを助け守るのが説教者の務めです。私たちは羊飼いであり、牧師です。委ねられたこれらの人々の世話をし、配慮してあげなければなりません。それで、自分をこの大きな責務のために備えることが私たちの仕事なのです。

ほかの読み物に触れる前に強調しておきますが、読書にはバランスを保つことが肝要です。これについては強調し過ぎることはありません。私たちは生れながら違つており、偏見や好みがあります。また時間の全部を神学を読むのに使う人もいれば、哲学や心理学に使う人もいます。しかも実質的に彼らはほかのものを全然読もうとしないのです。これはほんとうに危険です。そこでこれに対処するには自分でバランスのとれた読書法を決めることです。神学書を読んでもほしいのですが、私の言うようにバランスを保ってください。教会史ばかりでなく、伝記やデボーションナルのものも読んでほしいのです。なぜこれがそれほど重要かと言えば、自分自身の備えとして神学や哲学だけしか読まないなら、知的タイプの人は慢心する危険があるからです。自分には完全な神学体系があり、問題も困難も何もないと確信しますが、やがて幾つか

の問題や困難があることを発見します。そんなとき挫折を避けたいと望むなら、また自分には知らないことは何もないと得意になり、知性を誇りたくなるとき、一番良いのはジョージ・ホイットフィールドの日記などを手にすることです。その中でこの人がどのようにイングリッド、ウェールズ、スコットランド、そしてアメリカで神に用いられたかを読むことができ、またキリストの愛のさまざまな体験を読むことができます。それでもなお自分が虫けらに過ぎないと感じられないなら、その人は決して新生してはいないと言いたいのです。私たちは絶えず謙遜にさせられる必要があります。バランスのとれた読書が絶対に欠かせない理由もそこにあるのです。もしあなたの心があなたの頭脳と同じ程度にこれらの事柄にかかわっていないなら、あなたの神学は、ほかの点はさておき、欠陥のあるものです。このように過度に論理的、学問的、客観的、そして知的になる危険があります。それはあなた自身が霊的に危険な状態にある

だけでなく、それだけ不十分な説教者、牧師であるということです。自分に属する会衆を助けることもできず、召された責務をも損なうことになるでしょう。

それでこれに対処し、自分自身を守る方法はバランスのとれた読書です。必ずそれを実行してください。だれでも常に毎日、このような異なる分野のものを読むべきです。ところで私は肉体的ばかりでなく、ほかの面からも健全で有益だと考える一つの日課を作りました。それはもし午前と比較的硬く難しい本や直接神学に関する本を読むなら、夜には違うタイ

プのものを読むようにすることです。もし不眠症を避けたいなら、寝る前にあまり心を働かせたり刺激しないほうが良いでしょう。若いときなら問題はありませぬ——その時期には好きなことならほとんど何でもでき、眠ることもできます。しかし、年をとるにつれてそれが難しくなります。ですから私はしばしばこの点を精神的障害のある人たちや挫折寸前の人たちに話さなければなりませんでした。彼らの話を聞いて分ったことは、彼らはベッドにはいる直前まで精神的能力のすべてを呼び覚ますような内容のものを読む習慣があったことです。それで彼らの精神が働きをやめようとしないうるを知って、彼らはリラクセスすることも眠ることもできなくなつて驚くのです。これはごく常識的なことですが、たいへん重要です。このような理由からもバランスのとれた読書をしてください。

ところでこうした読書の目的は何でしょうか。繰り返しになりますが、その目的はおもに説教のアイデアを得るためではありません。それはもう一つの恐ろしい危険です。つまり聖書をメッセージのテキストを得るために読むのと同様、説教の題材を得るために読書をする傾向があるのです。私はこれを教職者の職業病と呼んでいます。一九三〇年に、一人の教職者が私に教えてくれたことを覚えています。彼は人々の霊的経験を深めるために開かれた家庭での集いかパーティーに出席しました。彼はその集いで得た大きな恵みを私に話してくれるというので、私は彼が経験した事柄とその霊的な意義について話してくれるものと期待しましたが、話

してくれたことは違っていました。「私はその集会ですばらしい説教の題材を見つけました」と言ったのです。何と説教の材料や題材と言うのです。要するに彼がその集会に出たのは霊的な恵みを受けるためではなく、ただ説教の題材——例話やほかの人々の経験談など——を得るためだったのです。彼は何事にもこのような姿勢で、実質的にすべての霊的な影響力に対して自分自身を閉じていたのです。つまり彼は一人の職業人になっていました。聖書を読むのもメッセージの箇所を得るため、本を読むのも説教のアイデアを得るためでした。

実際これはまったく馬鹿げたことになります。というのもメッセージを得ようと本に向かう説教者はよく暴露されるからです。私はそれをむしろ喜びます。私が南ウエールズにいたとき、このことが実際起りました。ある町に有名な宗教関係の書店があり、遠隔地から説教者たちが週に一度ならず、市場の中にあるその書店を訪れたのです。彼らはみなこの書店に行つては種々の本を買つたので、当然、だれもが同じ本を買うことになり、結果として彼らの多くが同じメッセージをしたのです。しかし不運にも、彼らの会衆や教会員が互いに知り合いで、一緒に会うとよく互いの教会や牧師のことが話題に出ました。それで一方が先週の日曜日に聞いたメッセージはすばらしかつたと話したところ、その相手が「その内容は何でしたか」と尋ねたのです。しかし、その答えを聞いて彼は笑いました。自分が聞いたのとまったく同じ内容だったからです。もちろん多少の違いはありましたが、本質的に同じメッセージでした。気

の毒にも、この説教者たちは自分たちの着想を書物に頼っていたからです。

別の牧師のことも思い出します。あるとき私は列車で旅行していて、偶然、一人の立派な牧師と同室になりました。彼はそのときロバート・ブリッジズの『美の契約』を読んでいて、私にこう話してくれました。彼はほかのだれよりも「その本の中の人物」から多くのものを「得られた」と語り、その本から多くの考えや説教の題材を得られたということです。本や雑誌それにどんな珍しい所からも着想を得る人たちはいるものです。

しかし、これは読書の主要な目的ではありません。読書のおもな目的と機能は何かと言えば、それは情報を提供することにあります。しかし、さらに重要なことは、それが一般的に最良の刺激となるからです。説教者が常に必要とするのは刺激です。

ですから着想を得るために本に向かうべきではありません。書物の本分は人に考えさせることです。私たちはレコードではありません。独創的に思考する者です。説教することも私たちは自身の思考の結果であるべきです。私たちはただ考えを運搬する者ではありません。説教者はただ水の流れる水路となるために存在するのでなく、井戸のようになるべきです。読書の機能とは一般的に私たちに刺激を与えて考えさせる、しかも自分自身で考えさせることです。あなたはそのすべてを吸収し、完全にそしゃくしてください。受けたことをそのまま繰り返してはいけません。自分の流儀で語ってください。あなたの特徴をそこに表し、それがあな

たの一部分となって表れるようにしてください。それが学問をすることの主要な機能で、この一般原則を強調する理由もそこにあるのです。回転させると同じことを繰り返すプレーヤーやテープレコーダーのようななら、それは悲劇です。そのような人はやがて実を結ばなくなります。彼はすぐに困難に陥り、会衆は彼自身が気づくよりずっと以前にそのことに気づくでしょう。

✦

✦

さて読書に関してもう一つの意見を述べます。それは一般書を読むことも大切だということですが、なぜでしょうか。特にこれと言った理由がなくても——ただ気晴らしのためにも良いからです。精神は休息を必要とします。緊張が過ぎて精神に極度の負担を与えると、やがて問題が生じます。精神には気晴らしと休息が必要です。しかし、休ませると言っても読書をやめてしまうのではなく、何か異なったものを読んでください。まったく異なったものを読むと精神はくつろぐことができます。この点での変化は休息と同じくらい有益です。しかも役に立つ一般的な情報を蓄積することになり、それは説教の背景としてすばらしいものとなります。そこで私は歴史を読むことも勧めます。好み次第にこの世の歴史や伝記、政治家や戦争の歴史でも良いのです。もしそのような主題に多少特別な関心があるとか何か趣味があるなら、それを利用して発展させてください。しかし再度、厳粛に警告しますが、あまり多くの時間をそれに用いな

いでください。危険です。この点では常に闘いがあり、また極端に走る傾向がいつもあるからです。もしあなたが特別に関心を持つ事柄があれば、節度をもってそれを育ててください。それはあなたの精神にとって有益で、快活さと初々しさを保持させてくれるでしょう。私自身もいつもそのように努め、一般的事柄や文学を扱う一つの雑誌を購読しています。それにはたいへん巧みな記事があったり、ほかの本の購読を促すような良書の論評があります。私は思考させるより「計算早見表」的な精神を助長させるダイジェスト版や百科辞典の類に信頼を置かないようにしています。

ところで教職者は常に自分自身で計画したバランスのとれた方法で読書をすべきです。何年も前のことでしたが、私は夏の休暇にはいつも一冊の部厚い本を持って行くことにしていたので、そのときは最新の「バンプトン講義録」を持って行きました。概してそれらは福音的な人による著作ではなかったのですが、彼らはみことばの真理の特定の面を広く概観できる人たちなので、バンプトンやヒッバートの講義録はたいへん重要でした。忙しい説教者にはそうした書物を継続して読む時間はないでしょうが、私はそのような作品を読むのに休暇を利用しました。まず妻がこの方針に喜んで賛成し、子供たちも同意してくれました。家族は私に午前の時間を与えてくれたので、その後の時間には彼らの提案することなら何でも行おうと覚悟しました。振り返って見てそうするように考えや知恵が与えられたことをうれしく思います。

ここで音楽についても一言述べなければなりません。音楽はすべての人に有益ではないにしても、ある人々にとって大いに助けとなっています。幸いにも私もその一人です。最近、ある人がカール・バルトの死亡記事を読んで驚いて言いました。バルトは朝にまずモーツアルトのレコードを聞いて始める習慣があったようですが、彼にはそれが理解できないというのです。「どうして理解できないのですか」と尋ねると、「カール・バルトのような思想家がモーツアルトのもとに行つたとは驚きです。きつとベートーベンかワグナー、もしくはバッハのもとに行くと思つていたからです」と彼は答えました。でも彼には驚きでしたが、私がこの人に感じたのは、明らかに彼は音楽の眞の価値もその用い方も知つてはいないということでした。そこで言いました。「カール・バルトがなぜモーツアルトのもとに行つたか教えましょう。それは思想や学問を得るためではないからです。一般的にモーツアルトが彼に働きかけ、気分をよくし、精神が幸福を感じられるようにしてくれたからです。モーツアルトは彼を解放して自由にし、自己の思考を可能にしてくれたからです。」こうした一般的刺激のほうが知的な刺激より有益な場合がしばしばあります。人間はその知性よりも大きな存在です。昔の預言者が琴やそのほかの楽器を用いて曲を奏でさせたのも、そのような理由ではなかったでしょうか。これに

関しては後でもう一度触れます。ですが何であれ、あなたにとって有益なもの、すなわち良い気分や状態にしてくれ、喜びを与えて緊張をほぐし、リラクセスさせてくれるものには計り知れない価値があります。音楽は驚くべき方法である人々にそうしたことを行つてくれます。私たちは説教者がどう自分自身を取り扱い整えたらよいのか、その方法の幾つかを扱っているということをお忘れなくください。ですからレコードであれ何であれ——自分の助けとなるものなら——それをかけてください。

最初に述べたと同じように、私は「己を知れ」と述べて終ろうと思います。あなたは自分の生活に多様性があることに気づかされ、生活のさまざまな様相や状態を経験するでしょう。自分を知ってください。何らかの驚くべき理由で、あなたの精神が最良の状態で働き、至る所にメッセージのアイデアを見出せるような満ち足りた数日、数週間があるでしょう。「木々に言葉があり、流れる川に書物があり、岩の小片にもメッセージがあり、すべてに良きものがある。」こんな状態が起きたら、両手を伸ばしてすべてのものを自分のものとしてください。それができるだけ紙に書き留めてください。潤いのない無味乾燥な時期が訪れたとき、それに頼ることができるようです。「己を知れ」とは、古くギリシヤの哲学者が与えてくれた忠告ですが、説教者にとつてもこれ以上重要な務めはありません。

私たちはこれまで、不十分ながら説教者自身の備えについて扱ってきました。だれもこの備えを充分にはできませんが、その必要に深く気づき、残る生涯それと取り組み続けるのです。そうして初めてメッセージの準備に取り組むことができるのです。

これまでの講義で説教の問題を扱ってきたことをもう一度強調します。「訪問はどうですか」と尋ねる人もいますが、私は説教者のあらゆる面を取り扱おうとするのではなく、説教を扱っています。なぜならこれこそ第一とすべき事柄で、非常に重要だと確信するからです。訪問やほかのどんな活動でも説教の欠如を償いえるものは一つもありません。実際、説教があるべき状態になく、他の働きの道備えをするのでなければ、訪問もたいして意味はありません。お茶と楽しい語らいの社交的な訪問に過ぎないなら、それは牧会的訪問ではありません。説教は説教者のほかのすべての活動の道備えをしてくれます。すでに述べましたが、それは個人的働きの道備えともなるのです。

それで私は訪問の主題を扱う予定はありません。あなたは私がかこれまで講壇での祈りや公の祈りのことを扱っていないと気づかれたでしょう。それをもっとも重要でないと見なしているためではありません。これも時間やほかの要因で説教に限定しなければならぬからです。講壇での祈りはたいへん重要です。礼拝式の中身も大切です。しかし再度申し上げますがそれも説教によって、すなわち説教者の説教に取り組む姿勢によって大きく左右されます。もちろん、祈禱文を使用する礼拝式ではそんなことは起らないでしょうが、それでも式文を読む教職者がメッセージをどのように準備したかは、その読み方にも大きく影響を与えてでしょう。しかし、今私はこうした事柄を扱うつもりはなく、何よりも主要な事柄である説教を強調したいのです。これはいくらか強調してもし過ぎることはありません。説教はすべての事柄を支配し、またその他すべてのことの性格を決定します。

さてメッセージの準備を考えるにあたり、序論ですでに言及したように私たちはまず大事な決断に直面させられます。どんなメッセージにするのか。伝道的なものか、信者や教会員の訓戒や慰めや建徳のためか。それとも聖書のメッセージを一般的に講解するものか。その決定は明らかに大切です。この点に関してもすでに言及したので、その大切さを繰り返し述べただけにします。それはこの章でもすぐに生じる問題だからです。

どんなメッセージにするかを決定した後、それを準備する実際的な問題に移ります。この

準備については絶対的な規則があると考えられる人もいますが、私はそうは思いません。この事柄については自分自身の理解と経験に基づく幾つかの試験的提案をすることにします。

一般的に言えば主題のための説教はすべきでないというのが私の持論です。それは次のような点からです。私は先の大戦でアメリカ軍のチャプレンをしたある人のことを覚えていますが、彼はイギリスでの出来事を話してくれました。彼はイギリスの一地方へ配属になり、彼の出席していた教会で、ある日曜日に説教するよう頼まれました。彼はその教会の靈的狀態をいろいろ判断して、結論を出しました。「自分が観察したところから考え、『信仰による義』のメッセージをしよう決めました」と彼は言いました。そこで私は彼に幾つかの質問をし、その結果分ったのですが、彼は有名な神学校の訓練を終了すると、直ちにさまざまの神学的、教理的な主題に関する一連のメッセージを準備しました。義認や聖化また摂理や終末論などに関するメッセージです。要するに彼はまず主題から始め、次にその主題を扱っている聖書本文を捜したのです。しかし、彼が実際礼拝で行ったことは「信仰による義」に関する講義でした。私が主題のための説教をすべきではないと言うのも以上のことからです。

さらに批判も覚悟で述べますが、私は教理問答による説教を信頼しないようにしています。私の尊敬する方にもこれを定期的に行っている人たちがいますが、これはみことばの真理に対して、おもに論理的で過度に知的な態度を生み出す傾向があるので、賢明な方法ではないと思

います。これは教理問答書を教える価値を認めないというのではなく、それを認めつつも、むしろこれは別のときに異なった方法で行うべきだと考えるからです。しかもそれを教育の問題と位置づけて、一連の講義の中で扱うのが良いと思うのです。しかし、もっと良いのは人々が教理問答書を自分たちで読み、討論グループで一緒に考えるよう教えることでしょう。

私がこのような発言をするのは、これまでも指摘したように、説教におけるメッセージは常々にみことばから直接生じたものであって、たとえそれがどんなにすぐれた人たちのものでも、人間が定めたものから生じてはならないと信じるからです。結局、これらの教理問答書も人々によって生み出されたものです。つまり彼らが特殊な歴史的状況のもとで、ほかの教えや態度に抵抗してある事柄を強調しなければと憂慮した結果によるものです。ですから最良のもので、不完全であったり特殊な面を強調する傾向があります。それで教理問答による説教についての結論は、すでに述べたようにみことばの説教によっても同じ目的が達成できるということです。教理問答もみことばから引き出されているからです。それに教理問答書の機能を考える、究極的にはそれは説教のための題材を提供するのではなく、むしろ説教の正当性を擁護し、人が聖書を読むとき、その解釈を保護するためのものです。それが信条集や教理問答書の機能です。聖書それ自体から直接神のことばを説教せず、毎年ただ問答書に基づいて、絶えず説教するのは確かに誤りです。常に見ることがあなたの前に開かれて、人々の心はみことばに對す

る人間の理解よりも、みことばそのものに向けられるのです。もっともあなたが説くみことばの意味や教えはあなた自身の理解による点があるとしても、この方法によるなら、特定の教会の教理を語っているのではなく、聖書からのメッセージを語っているのだという観念をより明確に保持し、強調できます。

以上の事柄が一般的に主題や教理問答に関して事実だとすれば、大きな問いに直面します——では一体どうしたら良いのか。随意の聖書箇所から説教すべきだろうか。随意の箇所というのは連続していないという意味で、日曜日ごとにあちこちの節や段落を取り上げ、メッセージに何の連続性も関連性もない場合のことです。それで随意の箇所からの説教にしたら良いのか。それとも連続説教にすべきだろうか。

しばしば説教者はこれについて強い意見を持っています。これは実に興味深く、また大切な問いです。前世紀最大の説教者とは言わずともその一人であるチャールズ・H・スポルジョンはこのことに関してかなり強い主義を持っていました。彼は連続説教の価値を認めませんでした。事実、彼は非常に強くそれに反対しました。彼は連続説教をしようとするのは厚かましいと言ひ、説教のための聖書箇所は与えられるものだから、説教者はこのことを主に祈り求めて、その導きを請うべきだと考えました。説教者が自分で決定するのではなく、聖霊の手引きや導きを求めて祈り、それに自分を従わせようとするとき、特定のテキストとその声明に導か

れ、メッセージの形式ができて、それを説き明かすことができる。彼は考えたのです。以上はスポルジョンやほかの多くの人が持っていた見解です。私自身そのような伝統のもとに育てられたので、聖書のある書ないしはその一部分、または一つの主題に基づく連続説教のことは聞いたことがなかったのです。

ところがあなたがたは連続説教の明らかな信奉者であるピューリタンの立場です。スポルジョンはピューリタンの愛読者でその礼賛者でしたが、実に興味深いことにこの点に関しては彼らとまったく一致しませんでした。

ではこの問題についてどう述べたら良いのでしょうか。私に言えることはせいぜい、これに関してもかたくなで身動きのできない規則を定めるのは間違いだろうということです。なぜ聖霊は一つの聖書箇所だけを導かれるように、その人に聖書のある段落やある書の連続説教をもするよう導かれぬのか、私には分かりません。なぜでしょうか。大切なことは——この点に関してはスポルジョンに全面的に賛成します——私たちは「御霊の自由」を保つことです。これは自分たちの支配できることではないからです。これから自分たちが行おうとすることを、いわば冷然と決定し、綿密に計画を立てるようなことは間違いです。私はそのように行った人たちを知っていますが、彼らは休暇を終えて次の働きを始めるときには、もう何か月も先のメッセージの聖書箇所のリストが作成されていて、その全期間どの日曜日にはどこを説教するかが

示されてあったのです。私はそれには徹底的に反対します。そんなことはありえないとまで言うつもりはありません。「風はその思いのままに吹き」とあるように、御霊の自由のもとでは不可能ではないからです。それに聖霊が働かれるのはいつも一つの特定の方法で、またそうあるべきだと言ってはいけません。ですが、一般的に言ってそのような予定を立てて公表することは、聖霊の主権と導きに制限を加えるように感じられます。ですから私たちは御霊に従うべきで、そのことをよく注意して確かめる必要があります。聖霊は任意の聖書箇所から説教するよう導いたり、連続説教をするよう導かれるからです。恐れをもって述べますが、私はこのことを何度も経験しました。

『霊的スランプ』（聖書図書刊行会刊）という題で出版された説教の本があります。その連続説教をすることになった経緯を話すなら、この事柄の例証として役立つかも知れません。私はほんとうはエペソ人への手紙の連続説教を始めるつもりでした——それが導きだと思われたからです。その決定をしたのは確かに自分です。ところがある朝、服を着ていたとき、まったく突然に、しかも有無を言わず神の御霊が「霊的スランプ」について連続説教するよう私を促していると思われました。しかもほんとうに文字通り、服を着る間に連続説教が心の中で整理されてしまったのです。あとはただ、できるだけ急いであちこちの聖書箇所と心に浮かんだ順序とを紙に書き留めるだけでした。霊的スランプに関する連続説教をしようとは、考えたこ

とも心に浮かんだこともなかったのですが、実に以上のようなことが起きたのです。私はいつもこのような予期しない出来事に大いに注意を払います。それは何よりもすばらしく光栄に富む経験となるからです。ですから私はこうしたかなり明確な勧告と思えることにはあえて不従順にならないようにします。その連続説教を行ったのも御霊ご自身が私に命じられたことと確信しています。

こうした事柄に関してもあまりかたくなな態度は避けるべきだと言いましたが、この主張を認めてほしいので、もう一言述べます。任意のテキストからの説教も連続説教もどちらも正しいのです。しかし、連続説教はいつでも中断されることがあります。もし霊的な圧迫があつて中断を余儀なくされていると感じるなら、いつでも中断すべきです。ですから私はこれから先三か月であっても、説教の予定表を出すようなことは決してしません。あなたにもそこまでは分らないでしょう——少なくとも私の場合はそうでした。特に注意を促され、すばらしい説教の機会となるような状況が生じるかも知れません。実際私は自分の用意したメッセージを最後まで語り終えられるという保証はできませんでした。通常与えられているメッセージの時間が過ぎて、半分しか終わっていないことが何度もありました。何が起きるか分らないのです。あなたが支配しているではありません。少なくともそれだけはしないでください。準備のときと同様、説教しているときも御霊があなたを用い、取り扱ってくださいなのです。誤解してほし

くないのですが、何も私はしまりのないことを擁護したり弁護しているわけではありません。その逆を強調するためにそう言ったのです。よく準備し、熟慮したものであっても「御霊の自由」を保ち、御霊のあらゆる働きに心を開き、敏感に反応しなければなりません。ですからあらかじめ説教の計画表を印刷してしまうのは、絶えず中断や変更の可能性があり、準備のときや実際の説教の間でもまったく予期せずにある主題を發展させることがあるので、賢明とは言えません。この事柄に関してあなたがどう決定するにしても、自由を保ってください。

さらに次の点も述べます。常に守るべき特別な祝祭があることも規則として決めたいのです。この点に関しては、私は遠慮なくピューリタンに対して批判を表明します。クリスマスと待降節には特別なメッセージを行うべきですし、受難日や復活祭また聖霊降臨日などにも特別なメッセージを行うべきだと私は確信します。

どうしたらこの主張の正しさを認めてもらえるでしょうか。ところでピューリタンはなぜそのことに反対だったのでしょうか。もちろん彼らはローマ・カトリックに対する激しい反発からこうした特別な祝祭に反対したのです。つまりローマ・カトリックが主の降誕の祝いをミサに取り入れたので、それに反対の立場をとったピューリタンは、私たちと同じく過度に激しい反応を示し、その結果、彼らはミサに少しでもかわりがあることやローマ・カトリックの考え方に関係していることなら何でも排除しようと強く願ったのです。そこで反対の極端に走

り、こうした祝祭日のどれをも守ることに反対したのです。

一般的には私は彼らの態度をよく理解でき、まったく同感できますが、やはり彼らは間違っていたと考えます。というのは、私たちの大部分が直面する問題はキリスト教信仰に包含される事柄や外面的事柄にあまり関心を持つことによって、その信仰の本質や土台そのものを忘れてしまう傾向があるからです。外形では表しますが、それらを説教することがほとんどないのです。説教がそうであるなら、私たちの語るのを聞く会衆もまたそうなるのは明白です。しかし、新約聖書の書簡に目を向けるなら、使徒たちが取り扱ったどんな主題でも、必ずキリスト教信仰のこうした根本的事実に戻って言及しているのを私たちは見出します。いづれにしても、四福音書は私たちにその事実と史実性を思い起させてくれます。

ところで今日非常に危険なことは、特にある集会では過度に知識偏重になっていることです。私は人々がキリスト教信仰に取り組む場合、あまり感情的にならず、もっと知性的になるよう努力してきました。しかし現在、ある人々は極端に知識偏重になって、私たちの信仰の土台である大切な歴史的諸事実に触れない危険があります。これは確かに警告される必要があります。クリスチャンでありながら、キリストの降誕に関する説教に感動しないなら、キリストの内にいるという自らの立場を再検討すべきでしょう。もしあなたが説教者としてカルバリの丘の十字架で死なれた聖なる主についてのメッセージに感動を覚えず、初めて説教するかのよ

うに感じることもなく、以前ほどの感動もないなら、再度言いますが、あなたも自分の信仰の土台を調べたほうが良いでしょう。同じことが信徒の人たちにも言えるでしょう。祝祭はこのような意味からも大きな価値を持ち、私たちの全人格的な立場の基となっている信仰の土台に私たちを立ち返らせ、思い起させてくれるものです。

それだけでなく、福音を宣べ伝える機会としてどんな特別な機会でも利用することは大切だと確信しています。ですからこれまで述べた事柄に加えて、私は新年の最初の日曜日をいつも利用します。「十二月三十一日と一月一日とにどんな違いがあるのですか」と尋ねられるなら、むしろ、ある意味で仰せの通りですが、それは純粹に知的な態度です。そんな言い方をするなら、すべての日が同じだと言うことになります。しかし、普通の人にとっては違いがあります。新年、それはさまざまな決心をするときです。もちろん、その決心にそれほど意味はなく、それによって何らかの結果がもたらされるのではないことは知っています。毎年人々は決心をしても、おそらく、三日坊主で終わってしまうかも知れません。それでも人々はこれをするのです。「では、このことに注意を払う目的は何ですか」と言うのも、あまりにも理論的なもの見方です。すでに見たように私たちはこうしたもの見方をしてはなりません。会衆や連なっている人々の状態を正しく評価し、彼らを人間として取り扱わなければならないのです。「知恵のある者は人の心をとらえる」ことを覚え、福音の真理を人々の肝に銘じさせるために

は、何であれ、それを利用すべきです。新年の初めは人生がまたたく間に過ぎ行くことを会衆に思い起させるとても良い機会なのに、だれもがこのことを忘れがちです。神学や知的、哲学的な問題には多く関心を寄せますが、自分が死んで行く者であることを忘れているのです。人も仕事や家族のこと、つまり「この世の事柄」に熱心になって、そのことを忘れがちです。

確かにこれは世の移ろいやすさに人々が深く心動かされ、ただ座って傍観して説教者や説教を批評する余裕などないことをどの人にも思い起させる機会として提供されているのです。そこであなたは彼らがすべてこうして事柄にかかわっていること、また理論上の主題などではなく、何よりも重大な事柄を扱っていること、さらにあなたは彼らが避けることも回避することもできない終局、すなわち最後の審判に向かっていると彼らに思い起させることができるのです。ですからこのことを用いない説教者は愚かであって、講壇に立つにふさわしくありません。

二、三年前私は落胆させられた経験がありますが、そのことをどうしても忘れることができません。それは次のような経験でした。年の変わり目に私はなぜかたいへん疲れていたので休暇をとって、新年の最初の日曜日、一人の若い牧師が執り行った礼拝式に出席しました。ところが驚いたことに、彼は次のように述べてメッセージを始めたのです。「さて、先週は某節の箇所を学びましたので、今週は次の節へ進みましょう。」彼は新年やそれに関することには一切触れませんでした。私は彼をかわいそうに感じました。せっかくの機会を逃したと思われたか

からです。いずれにしても、こうした祝祭は私たちの働きを容易にするもの、また説教者に備えられた好機でもあります。

私たちはいつでも世界で起きている出来事や衝撃的な事象を利用すべきです。私はマデレーのジョン・フレッチャーの生涯で起きた出来事を読んだことがあります。彼は二百年前に生きた偉大な聖徒で、イギリスのスタッフオードシャーにあるマデレーの教区牧師でした。突然、セヴァーン川沿いでもすごい災害が起きたのです。その年、セヴァーン川の水位は平常より高くなり、その結果、洪水で大勢の人が溺死しました。この災害でジョン・フレッチャーは注目すべきメッセージをするようになり、たびたびその悲劇的な出来事に言及しました。それが大変な結果をもたらしたのです。ちなみに、ほぼ同じ時期の一七五一年にポルトガルのリスボンで起きた地震のことを十八世紀のすぐれた説教者たちが利用しているのを読んだことがあります。彼らはみなそのような出来事を利用しました。地震そのものについて説教したのではなく、その地震を通して人々に人生の移ろいやすい性格に心を留めさせ、悔い改めに導くために利用したのです。地震は竜巻やハリケーンと同じく、人々に考えることを促します。ですからそうした事柄は説教者に良い機会を与えてくれます。「なぜならあなたの心がわたしの前にへりくだったからだ。」これは旧約聖書のヨシヤ王に対するほめ言葉です。私たちは「救い主よ。我が心へりくだり、我が心汝に従わせん」という賛美歌の幾行かを覚えていきます。私たちの心

がへりくだり、より神に応答しやすいときがあります。私たちがすべてこうした事柄を利用するのは知恵でありまた常識です。実際あなたはほんとうにすぐれた連続説教を準備したかも知れませんが、地震が発生したらそのことにも言及してください。そのような場合にも、機械的にただ決ったことしか話せないなら、あなたは絶望的です。

✧

✧

さて以上述べた事柄は任意の聖書箇所から説教すべきかそれとも連続説教をすべきかの問いに関する私の所感です。任意のテキストからの説教に関しては、すでに「説教者の備え」の章で言及しました。みことばを説教のテキストを捜すために読むという悪い習慣について警告し、みことばは常に私たち自身の益と薫陶のために読むべきことを強調しました。そのように読んでいて、ある箇所のみことばがあなたの心を打って感動を与えられたなら、それをどう捉え扱うかについても述べました。それを守り続けるなら、だれでも説教のテキストに欠乏することは決まっています。つまり自己の薫陶のために聖書を読んでいるときに備えた説教の骨子は山のように蓄積されるでしょう。

以上に加えてメッセージは、いわば与えられるものであることをあなたは発見するでしょう。メッセージは直接あなたに与えられますが、それに対してあなたはほとんど関与できません

ん。次の点はだれでも同意できることかどうか分りませんが、私自身の経験では牧会についた初期の頃のほうがこのことは多く起きました。私はそれをただ神のあわれみと考えています。

「主は、私たちの成り立ちを知っておられる」とあるように、神は私たちを知っておられます。私たちの働きの初期に一層こうした助けの必要なことを知っておられる神は、あなたが子供の成長を願って特別な励ましを与え、後ではしないようなことを彼らにしてあげるように、説教者をもそのように取り扱ってくださいさると私は思うのです。初め神はとても優しく、恵み深く、聖書箇所とメッセージをも与えてくださるのが分るでしょう。ときにはまったく完成されたメッセージを与えられるでしょう。しかし、後になってメッセージを苦心して作り上げ、私が指摘したような方法で奮起努力しなければならなくなるでしょう。任意の聖書箇所から説教することの問題については、それを扱うときまで保留しておきます。

メッセージの準備に戻りますが幾つかの方法が可能です。一つは聖書のある所を少しずつ進めてその書全体を体系的に終える方法です。もう一つは、たとえば山上の説教のようにある書の一断面やある章またその一部分を体系的に進める方法です。この点に関しては多くの可能性があります。先に指摘したようにクリスチャン生活という特定の面を扱う連続説教もできます。『霊的スランプ』の例を引用しましたが、もう少しそれに触れます。と言うのもそもそもこの連続説教をしようと決めたのも、私がこれまで述べてきた事柄と実際関連があったからで

す。私はどのように多くの骨子を蓄積したかを説明しました。これを長年続けてきたので、骨子なら山ほど持っていました。その朝、私が服を着ていたときに起きたことは、たくさんの子の中に霊的スランプに関してすでにでき上がったシリーズがあるということが示されたのです。でも全体としてこれをまとめて扱ったものがあったというのではなく、蓄積されてあった任意の聖書箇所のメッセージの中で、それらを順序立てて見ると一つの連続説教になりえるものがあつたということです。これは私にとってとても際立った経験だったので、忘れることはできません。今後もし忘れられないでしょう。確か私の記憶では、そのときすぐさま、二十一ほどのメッセージの骨子を紙に書き記したので、骨子はすでにあつたので、その瞬間、御霊が私に代って順序立ててくださったとしか思えません。それで私はただ束になってある骨子の中から示された別々の骨子を取り出して、それらを確認しただけでした。私にはこのようにして示された配列は完璧に思われたので、あえて変更しませんでした。最後に一、二加えたのもその蓄えの中にあつたものです。

再度述べますが、この方法そのものが良いだけでなく、説教者の重荷と労力を大いに軽減してくれます。それは土曜日になって翌日の日曜日の聖書箇所を必死になって捜し求めるような大変な状態を避けさせてくれるからです。これまでも土曜日の夜に自分の責務である準備をしないで寝てしまった人たちを知っていますが、もしあなたが私の提案する方法に従うなら、興

味深く、しかもおもしろい場合に作り上げることができましょう。

繰り返して強調しますが、その場合でも常に講解的でなければなりません。常に講解的です。もし私の提案する方法に従うなら、あなたの心を打った聖書箇所にとどまり、それを考察して入念に調べて骨子を生み出そうとするので、講解的になります。換言すれば、それらの骨子は講解の見出しともなっています。とは言っても、たとえば「霊的スランプ」という一つの主題を選び、自分の考えでそれを作り上げてしまい、次にその主題に関して自分の考えに合致しそうな聖書箇所を捜そうというやり方は認めることはできません。それこそ私の反対するところです。内容はいつでもみことばに起因していなければならず、また常に講解的でなければなりません。もしあなたがみことばの教えに忠実であるなら、真理のすべての異なる面を網羅できるでしょう。しかも多少哲学的な方法で作るよりずっとよい方法でできるでしょう。

ところで連続説教には長いのもあれば短いのもあるでしょうが、どのようにそれを決定するでしょうか。何年も前でしたが、神学生の集会に出席し、そこで連続説教の長さについて議論を交わしたことがあります。そのときの私は短いほうを弁護する側に立ちました。それまで自分が言ってきたことを撤回などできなかったからです。ですが、そのときの自分の立場はそれで正しかったと思います。こうしたことに規則や決りを定めることはできません。それはピューリタンの説教者を用いる場合のように、思慮分別が必要だからです。彼らに関するものを読

んで、「これはすばらしい。このようにすべきだ」と言うのは危険です。もしあなたが彼らと同じに行おうとしても、それはふさわしい方法でないと分るでしょう。なぜでしょうか。一つの理由として、それは説教者に左右されることだからです。それをできる人とできない人がいるので同じようにしようとするのは危険です。説教者の人格ばかりでなく、その人の成長段階にもよるからです。説教者は常に成長し、進歩し、発展していなければなりません。若いときにできなかったことも、中年や老年になればできるようになります。それで、こうした事柄でかたくなな態度は避けるべきです。

一人のたいへん有能な人物——十九世紀の人でしたが——について聞いたことがあります。彼はすばらしい神学者で、神学校の校長になる前はロンドンにある教会の牧師でした。日曜日の夜に、会衆はともに商人の夫婦たちでしたが、彼はエペソ人への手紙からの連続説教を始めたのです。その結果、会衆がかなり減ってしまいました。会衆はみな彼に対してこの上なく尊敬と賞賛をいただき、一人の人間としても好感を持っていましたが、実際彼の語ることはよく理解できなかったのです。会衆の理解力を越えた説教をしたので、彼らを養うことができなかつたのです。彼の意図するところは良かったのですが、そのメッセージは彼らにはあまりにも深遠で、しかもその連続説教は長過ぎました。それで彼らは理解できず、音を上げたわけです。

ですからこの点にはよく注意すべきです。すでに述べたことを再度強調することになります

が、絶えず自分自身と自分の会衆とを評価し、いつでもそれに合せる用意がなければなりません。変化を許さず融通性のない計画を進めてはいけません。ものの考え方や見方を変えても、

結局は、いつも一つの面や主題だけしか説教しない愚かな説教者のことを聞いたことがありません。だれかが彼の会衆の幾人かからその不満を耳にしたと彼に話したところ、「気に入っても入らなくても、それを受け入れるべきだ」と彼は答えました。ある意味でそう言うのは正しいのですが、この場合はまったく間違いです。説教者の働きは人々に説き、教え、真理を「受け入れさせ」、また誤りから離れさせることであって、真理を投げ与えることではありません。ですから説教者は状況の変化に気づいたなら、いつでも調整しなければなりません。

これを行うのは難しく感じるかも知れませんが、意味のあることです。私にとってはそれをするのは説教の働きのもっとも光栄に富む面の一つだからです。つまり説教が常に生きたものであり、いのちがあるということは説教することのスリルの一部です。決して固定したものでないものでもなく、説教者と会衆との間には絶えずこの相互作用と反作用があるのです。共に成長し、発展しながらこうした調整をしなければなりません。結局、説教の目的とは何でしょうか。あなたは何を行い、また何をしようとするのでしょうか。その目的は何でしょうか。それは会衆を助け、彼らを神のもとへ携えて行き、神についての知識を与え、私たちの「最も聖い信仰」の上に彼らを築き上げることではないでしょうか。ですから、常に調整でき

るように備えてください。

この段落の終りに強調したいことは、これまでも言ってきたように、それぞれの説教はそれ自体完成された一つの存在であることを確かめることです。これは連続説教をしているときにも適用されます。これをするにはメッセージの初めに二、三分の時間をとり、以前に語った事柄の概略を短く述べることです。私は「短く」を強調します。何年も前ですが、イギリスに一人の人気を博した——その言葉のもつ通常の語義ではなく、かなり名前が売れたという意味の——説教者がいました。彼の人気はかなり彼の深みのある声によると思われました。しばしばラジオでも語るようになり、彼の教会は次々と人が増えて行つたのです。私は彼の語るのを聞きによく出かけた婦人と話したことがあります。彼女はもう行くのをやめたといいました。その理由を尋ねたところ、「そうですね。彼は前回語つたことを教えるのに多くの時間を費やし、次回に語ることに多くの時間を費やし、毎回ほんの少ししか語らないのです。」このこ

とで彼女はともろうばいして、結局、聞きに行くのをやめたのです。これは説教者が現実にかなり陥りやすいわなであり、また誘惑です。ただ前回のメッセージの大意を述べるのに長くなるのは厳に戒めるべきですが、要約することは会衆にとって不可欠で、会衆すべてに有益です。これは続けて出席している人々にもそうであるばかりでなく、ほかから出席した人々にとっても絶対必要なことです。ですから連続説教をしていて個々の説教の文脈と全体との関係、

また次に続く事柄に多少触れることは必要です。しかし、それ自体は一つの完成したものでなければなりません。これはとても大切なことです。

これまで私たちは決定すべき重要な事柄を扱いましたが、ここで個々のメッセージの準備という実際の働きを扱わなければなりません。これにはどう取り組んだら良いでしょうか。明らかに、まず第一にすべきことは聖書本文の意味を扱うことです。この点に関しては大切な原則があります。絶対的に求められること——それは正直であることです。あなたは自分の扱う聖書本文に対して正直でなければなりません。自分が関心を持つ考えを取り上げる目的で聖書本文に触れ、勝手にその考えを扱ってはならないということです。それは聖書本文に対する不正直な態度です。二、三の例を挙げてこの点を明らかにしましょう。

私はある有名なラジオ牧師が語るのを初めて聞いたときのことをよく覚えています。彼は「あなたの苦難の場所を園に変える」という題でこれから説教しますと告げました。そのとき私は聖書のどこにそんなテーマとなる箇所があるのかと考えたところ、彼はすぐさまそれはヨハネの福音書一八章の初めにあると述べて、そこを読みました。その箇所には「主が受難された場所には園があった」という意味のことがありました。ですが、そのメッセージはあなたの苦難を園に「変える」でした。そこには全然そんなことは書いてありません。園はありませんが、それは受難される以前からそこにあったもので、受難が園を生み出したものではありません。

ん。でも彼は病に苦しむ人々がどのようにその試みに立ち向かうべきかについて、はなはだ感傷的なメッセージを語るためその聖書本文を歪曲してしまつたのです。彼はさらにその試みを純真な心で受けとめ、決して不満や不平を言わない善良な人々は自分の置かれた場所を園に変えることができるかと語り、それから約二十五分ないし三十分ほど、感情に訴えながらそのような人々の一連の話をしたのです。以上のことについては一言——まったく不正直なことだ——と言うしかありません。それ以外言うべき言葉がないからです。

もう一つの例を挙げましょう。これはシリヤのナアマンに関して説教した人のことです。ナアマンがヨルダン川——アマナやバルバル川と比べるならひどくつまらない川ですが——へ行って身を浸すようにとの命令に対して、強い反発を示した箇所の話です。そのメッセージの題は「人生において大切でないことの重要性」でした。これもまったく聖書本文の誤用であつて、その箇所とその文脈は「人生において大切でないことの重要性」を示すことではなく、もしナアマンが謙遜にならなかつたなら、彼は神に癒されなかつた。それで私たちもみな神の救いの方に従うべきだ、ということを示すことにあります。でもそのメッセージではその点は全然触れられなかつたのです。聖書本文に対するこのような冒瀆の背後にはただ自分の気に入る考えを引き出すために、たとえば、実際ヨルダン川はほかの川よりもつまらないという事実を引き出しますが、その箇所の真の意味も文脈も無視してしまうのです。これは浅薄というだ

けでなく、不正直で、靈的な声明に対する濫用でもあります。

さらにもう一つ例を挙げますが、これはもつと際立っています。私は故意に人気のある説教者を引き合いに出しています。彼の場合、題は「私の福音」で、その聖書箇所はテモテへの手紙第二、二章八節の、「私の福音に言うとおりの、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい」というパウロの言葉でした。でも彼は次のような質問をして始めたのです。「あなたは『私の』福音と言うことができますか。」と言うなり、直ちに「むろん、それは自分の福音ではないかも知れませんが、それがあなた自身のものとなっているでしょうか」と続けたのです。これが「あなたは『私の』福音と言うことができますか」という質問の真意でした。ついで彼は伝統主義、正統主義それに組織神学とあらゆる類の神学に関する長広舌をふるったのです。つまりここで大切だったのは「私の福音」と言える個人的経験でした。彼がそんなことを言うとはほんとうに驚きであり、信じられないことでした。なぜならパウロが明らかにここで述べているのは彼自身の経験でも彼の経験から生じたことでもなく、「ダビデの子孫であるイエス・キリストは死者の中からよみがえった」ということだからです。実際パウロはこの説教者が語ったことは明確に逆のことを書いています。すなわちパウロには唯一の福音——この唯一の福音を彼は宣べ伝えたのです——があるだけで、それはイエス・キリストは受肉した神の御子であり、肉によればダビデの子孫

として生れ、実に墓から身体をもつてよみがえられたという歴史的事実に基づく福音だということパウロは強調したのです。しかし、そのことはすべて無視され、実際否定されたのです。大切なことは個人的な体験で、自分の生活が変わったかどうかでした。彼はただ「私の福音」をこじつけて引用し、文脈はむろんのことその節の残りの部分をも無視したのです。それは実際、福音の神学的理解や「あなたがたのうちにある希望について弁明できるように」ということにも反する長談義でした。それはまた個人的な経験を高揚することであって、その経験の原因である事柄とは関係がないのです。これは聖書本文の語ることに對する不正直と濫用そのものであり、まったく不真面目なことだと言わなければなりません。

私たちは自分の用いる聖書本文に対して正直でなければなりません。しかもそれを常に文脈の中で捉えなければなりません。これは絶対的なルールです。しかし、このことを守らない人たちが存在します。聖書本文をじっくり見るのでもなく、その箇所に関心をいだくのでもなく、以上の人々はいつでも「よいアイデア」を捜しているのです。つまり彼らは主題やアイデアが欲しいのです。それで聖書本文を哲学的に思索し、自分自身の思想や道徳的解釈をそこに表現するのです。これはまったく神のことばの濫用です。聖書本文はその文脈の中で捉え、その本文に対しては正直でなければなりません。その箇所のみことばの意味と全体の声明の意味とを見出さなければなりません。これには以前にも触れましたが、ここで強調したいのはそ

の節や段落の持つ霊的な意味です。まず第一に正確であることですが、それ以上に重要なのは霊的な意味です。特定のみことばに対する理解の正確さを決定するのは、究極的には学識ではなく、その箇所での霊的な意味です。よく学識ある権威者たちの間で互いに意見のまったく異なる事柄が、正確を期する科学によって決定されずに、霊的な知覚力や理解力によって決定されるのを見るからです。それがヨハネの手紙第一、二章二〇節と二七節でヨハネが述べている「注ぎの油」なのです。

こうした手順によってこの本文のメッセージが明らかになりますが、ここに至るためにその本文に問いかけることを学ばなければなりません。これほど大切なことはありません。たとえば、なぜ彼はそのように語ったのか。なぜそのような表現をしたのか。彼のねらいや目的は何か、などと問いかけてください。説教者がまず学ばなければならぬことの一つは、自分の聖書本文に問いかけることです。それがあなたに語りかけるのですから、あなたもそれに語りかけなければなりません。聖書本文に質問してください。これはほんとうに有益で、励ましとなる手順です。でも決して無理な解釈をしてはいけません。ある考えが浮かび、興奮と戦りつを感じても、その聖書本文に適合するには操作やこじつけをする必要があるならやめてください。こじつけの聖書解釈をするくらいなら、上手なメッセージを犠牲にすべきです。またその後でもその途中でも自分が理解できた事柄を語句辞典や注解書で調べて見なければなりません。

特に私が関心を持っているのは、あなたが個々の聖書本文や声明の中心的なメッセージや趣旨をほんとうに捉えたかどうか確かめているかということです。立派な人たちでもこのことをしないのには、たいへん驚きます。おおよそ人は自分で説教することによって説教を学ぶのでしょうか。それともほかの人たちの説教を聞いて学ぶのでしょうか。私にはさしたる確信はありませんが、その両方が必要だと思っております。しかし、最近病気をしていた間、また手術後の回復期のほぼ六か月間、一人の聴衆として大いに学ぶところがありました。ある日曜日の朝、私はガラテヤ人への手紙三章一節からの説教を聞きました。「ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。」そのメッセージの題は「協道にせれる危険」でした。導入部については、テーマとなる「惑わす目」についてのくどくどした説明と催眠術に関するわずかの言及を除けば、立派で適切だったと感じました。私は聞く準備が充分できていたので、それらの点も悪くはなかったのです。でもメッセージのほかの部分については、心をそぐような、特に神学や正統主義の事柄が熱心に語られました。

ところでこの説教者には主要なメッセージが欠けていました。確かにパウロが語っているのは「ああ、惑わされ真理に従わないガラテヤ人よ。あなたがたの前にあんなにはっきり示されたのは十字架につけられたイエス・キリストではありませんか」ということで、このガラテヤ

ついでと言及がほとんどなかったことです。たいへん見事にその箇所の言葉を幾つか説明し、確かにイエスは神の御子であることを強調したのですが、私は復活というこの仰天するような出来事に驚きを感じることなく、立ち去りました。しかしこの使徒によれば、この出来事こそイエスを「神の御子」と「宣言する」事柄であるのに、そのイースターの朝の説教には全然その訴えがなかったのです。でもそれがパウロ自身の語る訴えであることは確かです。

またある受難日の朝、一人の有名な説教者が「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」というローマ人への手紙八章二節から説教しました。彼の主題は彼独特の聖化の教えであることが分りました。つまり彼は「全き聖め」を信じていたのです。私たちが共に集ったのが金曜日の朝だったので、私たちの主の死が歴史的事実であることを人々に考えさせる良い機会でした。でも私たちの心はそのことより特殊な聖化論に向けられたのです。このことが生じたのもやはり聖句の誤った理解のためですが、そればかりでなく、前後の聖句をまったく無視したためでした。本文の主要な訴えや使信に達することの重要性についてはいくらか強調してもし過ぎることはありません。しかもあなたがあなたを導き、教えるものでなければなりません。それに耳を傾け、その意味を求めて問いかけることです。それをあなたのメッセージの重荷としてください。

人たちにパウロは驚いているのです。どの点でそうかと言えば、パウロが彼らの前で明らかに示した偉大で栄光ある事実、すなわち、彼らの前で「はっきり示し」、「宣言した」カルバリの丘の十字架での「神の御子」の死という驚くべき事実からガラテヤ人の注意がそれであったことです。パウロの驚きは彼らが「十字架の栄光」から迷い出てしまったことであつたに、そのメッセージでは十字架の意味とその使信は一言も語られず、時間は「枝葉」の、つまり私たちの心をそらす事柄を語るのに費やされ、何から私たちの心がそらされるのか何も聞かされませんでした。かつて十字架の栄光を垣間見た者が割礼のような事柄に夢中になって、それを忘れてしまったことにただ驚き仰天しているとパウロは言い表しているのに、そのことは全然出てこなかったのです。ある意味でその説教者は、正統主義に対する彼の攻撃を除き、まったく正しいことを語ったのですが、私の興味を引いた点は、彼が自分の説教している聖書本文そのものから中心的な訴えを引き出せなかったことです。彼こそ明らかに「惑わす目」によって魔法にかけられていたのです。

ですから聖書本文の中心的な訴えを理解し、それを確実に引き出すことほど重要なことはありません。また別の説教者はイースターの日曜日、ローマ人への手紙一章一—四節の、「聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によつて公に御子として示された方」という箇所から説教しましたが、決して彼のものであつてはいけません。その際に驚いたのは復活に

11 メッセージの形式

さて、聖書本文から主要な使信と訴えとを見出したなら、次は実際の文脈と適用の中でそれを語るようにしなければなりません。たとえば、それが使徒パウロの書き送った特定の教会に適用される事柄であれば、あなたは本来の文脈とその適用とを示さなければなりません。

その後でそれがいつでも効力を有する一般原則の声明でもあることを示すようにするので、その当時の特殊な状況のもとで真実な事柄であっても、霊的原則は常に適用できるものです。こうして真理がただ一時代、一地方への適用にとどまるのでなく、より一般的なものであることを論証するのです。

この点に関しては、聖書のほかの箇所にある並行記事に注意を向けさせることによって、その事柄を強調するのは賢明だと私はいつも感じています。つまり聖書のある箇所で見出した事柄をほかの箇所と同じような声明によって支持を得て、それが孤立したものでないことを示すのはとても価値ある重要な原則だと私は確信しています。多くの理由からもそれは賢明なやり

方です。異端は、ある特定の声明から一つの考えを捉えそれを誤って解釈し、聖書のほかの箇所を照会せずに、早合点してしまった人々です。しかし、聴衆にとって説教で語られる事柄が健全で、信頼できる聖書の教えだと知ることはいつでも有益です。そこで聖書の並行記事を探し、同じことが幾分異なった状況の箇所でも述べられているが、本質的には同じ要素であることを示さなければなりません。そうして後、今日との関連性やあなたの説教を聞いている人々との関連性を示すことができるのです。

以上はまだメッセージに至る前段に過ぎません。つまりあなたがそのようにして発見した主題や題材または原則をどうもっていくのかというその方法に関することだからです。

ところでそれは一般的に採用すべき手段だと信じていますが、それに変化を与えるのも決して悪いことはありません。ときには今日の状況から始め、その概要やアウトラインを示してから、「ではこの点について聖書は何と言っているでしょうか」と尋ねるのも良いでしょう。準備の段階で実際そうするのではなく、ときには導入の仕方として良い方法であるということ、あなたの教会の問題や、あるいはもっと一般的に生じた深刻な問題や状況があるなら、それを導入として用いるのも悪くありません。確かにそれは人々の興味を引き、注意を一点に向けさせ、あなたの語るものが理論や学問上の事柄ではないと明らかに示すことができるでしょう。ですから、ときには現在の情勢をまず述べて、それから今説き明かしている聖書箇所が

まさにその点を扱っているということを示すのは良いことです。そうすることによって聖書は常に現代的で決して時代遅れのものではなく、いかなる状況をも取り扱えるということを示すことができるのです。それと同時にあなたの説教がいつも聖書から生じていることも強調することになります。むしろ私は自分で述べてきた一般的習慣やしきたりを支持しますが、どんな方法にも隷属してはいけないとも言っておきます。私たちは常に自由で、みことばの真理を宣言するために採用する方法の変化にはいつも備えているべきなのです。

✧

✧

ここで私たちは人々に語ろうとする原則や教えの扱いに触れますが、次の段階としてそれを幾つかの命題や標題または見出し——呼び方はどうあれ——に分けなければなりません。これについては話すことが多くあります。まず幾つに分けるかということですが、この点に関しては完全に束縛されている説教者がいます。必ず三つの「見出し」にしなければならず、それ以外はだめだと言うのです。見出しが二つ以下であれば悪い説教者で、四つ以上でも悪い説教者だと言うのです。もちろんこれはまったく馬鹿げていますが、人はいかに容易に習慣に陥りやすく、伝統に縛られるかを知らされて驚きます。確かに私も「常に導人と三つの見出し」の伝統の下で育てられました。会衆もそれを求めたのです。ですから三つに分けることは説教者の

ほとんど変らない習慣でした。

かのウェールズ長老教会という教会で伝統となっていたことは非常に馬鹿げていました。その教団のもっともすぐれた説教者の一人で、事実その設立者の一人であったダニエル・ローランズのメッセージにはしばしば見出しが十個もありました。ローランズの説教を聞いていると、すばらしい香料のはいつたびんをたくさん持つ薬剤師を見ているようだ、とその時代のある作家が述べました。まず最初のびんを取り出して栓やコルクを抜くと、すばらしい芳香が放たれ、それが会衆全体に漂います。それからそのびんを下に置いて、次のびんを取り出しては同じことをするのです。こうしてびんが十本にもなることがしばしばでした。私がこんな話をするのも、私たちはこの事柄で縛られてはいけないことを強調するためです。

しかしもっと重要な事柄に目を向けましょう。この「見出し」について重要なことはそれが聖書本文の中にあり、そこから自然に生じたものであることです。これは非常に大切です。今私が見ようとしているように、実際幾つかの見出しに分けるのは口で言うほど簡単ではありません。でもこの点で特異な能力を与えられている人もいます。アレクサンダー・マクラレン——十九世紀末から今世紀の初めまでのイギリスのバプテストの説教者で、その説教集は今もって再版されていますが——については、次のように言われています。彼の手には一種の黄金の槌があり、それで聖書本文を打つと、たちまちそれがちょうど良い見出しに分けられた

ジには三つの見出しが必要で、そうでなければ立派な説教者ではないと感じていたので、結局、そのメッセージの区分は次のように述べられました。「悪い人に見られる良い特性」、「古ぼけた馬具」、そして「最後の第三はサマリヤの女に関する二、三の言葉」でした。これは実際にあったことです。この例からもテキストに無理な解釈を押しつけたり、加えたりすべきでないことを学びましょう。機械的に三つと考えることに縛られてはいけません。

同じほど重要なことなので述べますが、区分するにあたり巧妙になったり、スマートになり過ぎてはいけません。これはほんとうに多くの説教者にとってわなでした。今日ではそれほどでもないかも知れませんが、今世紀の初めにこれほど説教者に害を与えたものはないでしょう。巧妙な見出し、上手で現代風な見出しによって説教者は自分の頭の良さを披瀝しました。説教者がいつも直面する大きな危険の一つは（このことは後で扱いますが）専門家気質です。牧師が集まると世の男性たちがするように「冗談を交わす」ことよりも、「このことをどう考えるか。この段落のこのような区分をどう思うか」と話してはこうした事柄を交換し合い、競うことさえありました。これが専門家気質です——私たちはみなそうなりやすいものです。あらゆる点から言ってそれはまったく悪いことです。私たちは決してそのように神のことは扱うべきではありません。巧妙さや利口さを出さないでください。人々はそれを見抜き、あなたが神の真理や彼らの魂よりも自分の頭の良さにもっと関心があるという印象を受けるでしょう。

と。しかし、私たちの多くはこの黄金の槌は与えられてはいません。私たちがいつも確かめなければならぬことは、こうした区分が聖書本文から自然に生じたものであることです。最初に否定的な事柄に言及します。と言うのもこれは非常に重要だからです。無理な分け方をしないでください。つまりある種の完全数を考え出して、その習慣に合わせるため、区分の数を増やすことはしないでください。見出しは自然で、必然的だと思われるものであるべきです。

ここで見出しは三つにしなければならぬという考えの愚かしさを示し、また誤った加え方に注意を促すために一つの話をしませう。一人の風変わりな老説教者のことです——私は直接彼の語るのを聞いた記憶はないのですが、確かに一度彼に会ったことがあり、彼についての話を多く覚えています。彼はほんとうに変わり者でした。過去の時代にもそんな人が教職者の中にいました。今日でもときにはそのような人がいます。彼はあるとき、「朝になると、バラムは起きて、彼のろばに鞍をつけた」という箇所から説教しました。説教題を紹介し、聴衆にその物語を思い起させてから、彼は区分について触れました。「まず第一に、私たちは悪い人にも良い特性を見出せることです。『バラムは早起きした』とあります。早起きは良いことです。これが第一の見出しです。第二は、古ぼけた馬具です。『彼はろばに鞍をつけた』とあるからです。馬具は近代的でも新しくもなく、古い時代に作られたものです。『それ以下は霊感が消えてしまったのか、もう一つの見出しを思いつくことができなかつたのです。でも彼はメッセー

しよう。伝えるべき使信が与えられても、それを提示する「形式」を考えると、満足すべき区分が全然できないのです。ですからこのことには充分注意を払ってください。急いだり、こじつけてはいけません。自分を知ることがとても役立ち、報われるのは特にこのところです。私は前の講義で自分自身とその気質を知り、また異なる精神的、肉体的、霊的な状態や状況を知り、それに応じて自分を扱うべきことを指摘しましたが、メッセージの素材を正しく区分し、ふさわしい形式にまとめることは苦闘を要することで、私は一種の精神的な混乱に陥ることが何度かありました。明瞭な思考ができなくなつて、張りつめた状態になるのです。しかしメッセージの形式のために何時間も無為に費やすことはできません。その状態から解放された方法には千差万別ですが、この点に関しては私たちに生じることも未信者に生じることも同じです。この主題を扱った最良の書の一つは『創造のわざ』という題で数年前に出版されたアーサー・ケストラーの本です。もちろん、彼は私たちの論じている事柄に関心はありませんが、特に偉大な科学的な発見がなされる方法と詩とに興味をいだいています。彼の指摘する大きな要素の一つは、もつとも注目に値する科学的発見は純粹に論理的思考の過程による結果ではないのが一般的な事例だと言うのです。つまり発見の過程においてそのことにはある役割を果すが、一般的にその偉大な発見は突然、思いがけず生じていると彼は述べています。すなわち「賦与された」ものだと言うのです。科学者が一步一步研究を進め、その結果として究極の段階に達

さらに、いわゆる「頭韻を巧みに利用する傾向」があります。見出しがみな同じアルファベットの文字——三つのBとかMなど——で始まっているのは便利なので、この頭韻の要素を取り入れるべきだと確信する人もいます。あえてこれが間違いだとは言いませんが、多くの人とつてそれはわなだと確信しています。ほかの二つの見出しと同じ文字で始めるために、ときには語る素材を多少操作しなければなりません。しかし、それこそ決して行つてはならないことです。「信仰の篤い」、敬虔な説教者と自認する人たちがこうした慣習にとらわれているのに、私はいつも驚くのです。私自身は慣習を大いに嫌うほうで、一般的にそれを真理を提示する妨げとなるもの、厄介なものとしています。人為的、技巧的と疑われることは何でも避けてください。私たちの見出しは素材から必然的に生じた区分と映らなければなりません。

メッセージの見出しや区分の問題についてはもっと多くの要点があります。このことでは充分時間をかけてください。なぜなら主題を分ける目的はすべて人々がみことばの真理を受け入れ、それを理解するのを容易にするためだからです。それが区分することの唯一の理由です。私たちは「技巧のための技巧」を信奉する者であつてはいけません。これをするのも人々を助けるためですから、ふさわしくなすべきです。

先に触れた説教の形式の問題もこの点で再度出てきます。ですからこの事柄には時間をとらなければなりません。ときにはこれぞと思う適切な形式を得るのが非常に難しいことがあるで

したというのではなく、——決定的なこととはしばしば一種の啓示の閃きとしてもたらされた。そこで彼は自分の命題を例証するために、かつてのフランスの大統領で、一度ならず首相も務めたポアンカレのことを述べています。ポアンカレはすぐれた数学者でもあり、あるとき一つの数学の問題に取り組んでいました。(訳注・著者の勘違い。政治家のポアンカレ(一八六〇—一九三四)は数学者のポアンカレ(一八五四—一九二二)の弟。)何か月もその問題に没頭したのですが、解くことができなかったのです。その都度かなりの所まで進むのですが、それ以上進まなかったのです。答えはあると知りつつも、そこに到達できませんでした。こうして何か月も過ぎて、彼は多少疲労を感じたので、海岸にある小さな村に滞在しようと思いかけました。気分転換と健康のためでしたが、多少でもできるのではと研究している物も持って行きました。しばらく滞在しているうちに、この問題についてはより進んだ助けを得るため仲間と相談しにパリを訪れなければならないと感じました。以下はそのときに起きた事柄です。村からその地方の町までは小さなバスに乗らなければならない、そこに着くとさらに次の大きな町へ行く大きなバスに乗り、その町で最終的にパリ行きのバスに乗るわけです。

何が起きるのかも知らず、彼は出かけました。ローカルバスは途中遅れて、ポアンカレが町に着いたときには、次に乗るべきバスはまさに出発寸前でした。間に合うかどうか危ぶまれましたが、彼は急いでカバンを取ってバスを降り、必死になって走ったのでかろうじて二番目の

バスの後部にある横棒を握り、ステップに身を乗せることができました。ところが彼の両足がステップに乗ったとき、突然、目の前にあの数学の問題の解答が明瞭に現れたのです。これはまったくの事実です。こういうことが起きるのです。非常に驚くべき現象で、また心奪われるような見本です。私にも幾度かこのような経験があります。

私たちはみな異なった存在ですから、自分自身のことしか述べられません。私自身のこととして、もし自分の説教が明確でなく、心の中で秩序立っていないならば、ほかの人々に説教はできません。講壇に立って語ることはできても、おそらく人々の助けとなるより、むしろ彼らを混乱させるでしょう。ですから私は、説教のこの秩序と形式をとっても重要なことと見なし、それを形造るまで苦闘すべきだと勧めるのです。あるときなど、私は一つの聖書本文に取り組んで、それに午前の時間を全部使っていました。それでもまとめることができませんでした。そのとき——何年も前のことですが——妻が昼食だと私を呼びました。その頃、クリストファー・ストーンという人が、毎週ラジオで新譜のレコードを紹介していて、昼食時には私たちはよくその番組を楽しみにしていました。そのときも聞いていると、彼は二、三枚レコードをかけましたが、私には全然興味ののないものでした。それから彼は非常に有名な二人の歌手のよく知られたデュエットのレコードをかけると言いました。その一人は確かベニアミノ・ギグリイだったと思います。その完璧とも言うべきハーモニーの、実に感銘を与えるようなレ

ことがあるでしょう。そう感じるときにはそれを大切にしてください。あわてて不十分な準備でそれをだめにならないようよく時間をとってください。

次の要点は見出しを全部一度に伝えるべきかどうかということです。まず最初のポイントを扱う前に見出しを全部知らせるべきだと言う人もいますが、古くからの伝統がそれです。ピュリタンもスボルジョンもそうしました。

そのように行った人たちが賞賛しつつも、私はその伝統に従わない傾向があります。その理由としては、この問題も機械的に扱われていると感じるからで、それは会衆にとっても悪いことだと感じてきたからです。説教には常に闘いがあり、それは題材とメッセージの形式との闘いです。これは何度言っても言い過ぎることはありません。もちろん、両方とも重要であるがゆえに、両者の間にはこの緊張状態が存在するのです。私はこれまで形式の重要性をできる限り強調しましたが、形式に素材を従わせてしまう危険も同時に強調したいのです。と言うのも、まだ第一の区分を取り上げる前に見出しの全部を述べてしまうと、人々は語られる真理よりも形式や構成のテクニク、また技巧のほうに多く関心を持つようになると感じるので、私はこれを避けるようにしています。

この時点であなたはもう一度自分の注解書に戻って、これまで備えたものを点検すべきです。すでにそれらで言葉の正確な意味や文脈などを調べたと思いますが、再びそれらに戻って

コードを聞いていて、満足を超えて、感情的にも感動を覚えました。そのときです。午前何時間も格闘した問題がすべて解決し、適切に決まったのです——順序、区分、そして形式もすべて。私はそのレコードが終るとすぐに書齋に駆け込み、忘れてたり、抜かすことのないようできるだけ急いで書き込みました。私が必要としていた精神的な混乱とこう着状態からの解放はその曲によって与えられたのです。

私はこの形式と区分とをたいへん重要だと考えています。与えられた聖書本文で納得できる好ましい区分ができなかったとき、不満足な状態で説教せず、それをやめてほかの箇所を取り上げてメッセージを「創作した」こともありました。でも自分に与えられ、そこに特別なものがあり、それを説教すれば神が栄光を与えて、人々の助けとなると感じるメッセージを損なってしまうより——いつもより立派に語れそうな事柄をだめにし、台無しにして中途半端で語るより——むしろそれをしばらく取って置きました。私はそんなメッセージを一週間でも二週間でも、ときにはもつと長く取って置きました。その後でもう一度それに戻り、最終的に自分の満足する形式に整えて説教したのです。

次のような原則——自分のうちですばらしいものになりそうだと感じる事柄は決して損なってはいけない——を定めるのは良いことです。メッセージはとも変化のあるものです。ときには今準備しているメッセージが自分の生涯でもっとも良い説教の一つになりそうだと感じる

ないのか。私が再度言えることは、この事柄に関しても絶対的な規則を定めてはいけないということ。なぜなら、どの規則を決めてもそれは説教の歴史という試金石に立ち向かうことはできないからです。かの偉大なチャールズ・ハッドン・スポルジョンの場合、彼は説教の全部を書き出しませんでした。準備したアウトラインを使っただけです。どちらかと言えば、説教を書き出すことには賛成ではなかったのです。彼は幾つかの項目を書き記すという方法をいつも行いましたが、メッセージを書き出すことはしなかったのです。一方、スコットランドの自由教会の偉大な指導者で、すぐれた説教者のトマス・チャマーズ博士の場合、説教は全部書き出さなければならぬと考えました。彼は何度も、原稿を持たない説教者になろうとしたのですが、いつも完全な失敗だったと感じ、彼にはそれができなかったからです。ですから彼は説教の全部を書き出さなければならぬと感じました。結果として、その方法がスコットランドにおいて伝統となり、今日まで続いています。チャマーズが最初にこれを始めたのです。彼より以前のスコットランドでは説教を書き出さず、原稿を持たないすぐれた説教者たちがいました。しかし、チャマーズは立派な人物で、一八四三年にスコットランドで起きた教会分裂の際の偉大な指導者でした。それで彼は一つのしっかりした伝統を打ち立てたのです。以上のようなことは起りうることなのです。

この点でジョン・エドワーズの場合はたいへん興味深い例です。最近まで私はエドワー

メッセージやその区分方法について点検することです。それは正確を期すためです。骨子が備えられ、その区分がクライマックスとその適用に至っているかどうかを確かめるのです。もちろん、以上のことはメッセージの準備とそれを語るための要点であり目的です。

ところでこのことは二つの方法のいずれかによって行われます。これらを全然書き出さず、心に留めておくだけの人たちがいますが、私は準備したアウトラインを書き留めておくことの大切さを改めて強調します。この方法は一層心を刺激してくれるからです。「心のうちで」思慮思考する人々がいますが、時々述べているように思考方法もさまざまです。このことでは私たちはみな異なっています。話しているときにもっともよく考えられる人もいれば、書いているときにそうである人もいます。「エリート」と呼ばれるような人は「心のうちで」考えます。自分がどのグループに属するかを見分けて正しく自分を評価してください。おそらく私たちのほとんどにとって、「骨子」を紙に書き留めておくのが良いでしょう。良い考えが浮かび、それに深く感動を覚えたので何もかもうまく行くと考えても、いざそのメッセージを語るようになったら、案外適切に捉えていかなかったという人が大勢いるからです。ですから紙に書き留めるようにしてください。

ここであなたは大きな決断に迫られます。つまり備えたアウトラインをどう処理するかという事です。二つの可能性があります。すべてを書き出したほうが良いのか、そうすべきでは

ズはどのメッセージもいつも一言一句書き出していたとばかり思っていました。確かに彼の初期の頃はそうでした。そればかりか、実際講壇で人々に向かってそれらを読んでいたのです。彼が片手にろうそくを握り、もう一方の手に原稿を持って講壇に立つ様子について有名な話があります、それが彼の説教方法でした。しかし一九六七年、私はエール大学の図書館で彼の著作の出版責任を持つ二人の学者に会う機会が与えられましたが——彼らは彼のすべての原稿を持っていたのです——、そこでとても興味深く感じたのは、年を経るにつれてエドワーズは自分のメッセージを全部書き出さなくなり、メモ書きのようなもので済ませていたことでした。明らかに彼は自分の方法を次第に変え、発展させたのです。ほかの多くの点でもそうでしたが、この点でも彼は何と賢明であったことでしょう。

こうした事柄に絶対的な規則を定めるのは常に間違いです。再度述べますが、どの人も自身を知り、自分で決定すべきです。私がいつでも重要だと見なすことは、自由を保つべきことです。この要素はほんとうに強調されなければなりません。しかし、同時に秩序と首尾一貫性が必要です。説教というこの事柄ではしばしばそうですが、あなたは常に両極端の間に立たされます。つまり剣の刃の上に立たされているのです。

しかし、ここで一つ質問をしたいと思います。この二つの方法——全部を書き出す場合と原稿を持たない場合——を一緒にできないでしょうか。多くの点でそれは私にとって理想的だと

思われます。そして確かにそれを私は最初の十年間の働きで行いました。一週に一つの説教を書くようにしました。二つ書こうとしたことは一度もありません。でも最初の十年間は一つを書くようにしたのです。書くことはよい訓練であり、論点について秩序立って考え、整理し、結論づけ、それを発展させるのにも良いと感じたからです。それで特に私が行ったことは、書き出したものと原稿を持たないものとの両方を使用することでした。私がこの方法の良さを弁護できるのはそのためなのです。

それでもしどちらのメッセージを書き出したかと問われるなら、すでに述べ、また今でもそうですが、私は午前は聖徒の薫陶のため、晩は伝道メッセージと自分の働きを分けてきたので、伝道メッセージのほうを書くようにしました。なぜかと言えば、聖徒や信者に話すときのほうがリラックスできるからです。この場合には家族という領域で話すことができます。しかし、伝道メッセージではたいへん気を使わなければなりません。話すのがかなり流ちょうで、厚顔と言わないまでも、自信のある人だから伝道者に適しているかという点、それはまったく誤りだというのもそこにあります。もともと偉大な人たちは常に伝道者であるべきです。一般的にこれまではそうでした。通りの角に出て語るのはだれを立ててもいいが、教会の講壇には立派な説教者を立てなければならぬという考えは、私に言わせると順序が逆です。神を信じないこの世に語るときこそ私たちはよく注意を払わなければならないのです。ですから、私は

伝道メッセージを書き出すようにしました。しかし、このことでもあまり独断的になったり、かたくなにならないようにしましょう。時がたつにつれて、ほかの多くの人と同じように書き出すことが少なくなりません。私は最後にメッセージを書き出したのがいつだったか、今思い出せません。しかし重要な点は自分自身を知り、自分に正直で、しかも自分もつとも効果的だと見なすことを行うことです。

メッセージを全部書き出すか、部分的にするか、あるいは原稿を持たずに説教するか、いずれにしても骨子だけを説教することは決してしないでください。骨子は装われなければなりません。すなわち肉づけが必要です。再びメッセージの形式の問題に戻りますが、メッセージは幾つかの声明の単なる寄せ集めではありません。それには形式や統一性という、よりすぐれた性格があるのです。しかもそうあるべき理由は人々にとって有益であるから、ただそのためです。「技巧のための技巧」ではなく、会衆が聞くときの助けとなるからです。これを次のように表現してみましょう。建物を建てるのに足場は絶対必要ですが、完成したときには足場は見当らず、見えるのは建物だけです。骨組みもありますが、それは覆われていて、目的の建物を建てるのに役立つものとして存在しているだけです。

人間の身体についても同じです。輪郭すなわち骨格はありますが、肉で覆われて初めて身体と言えます。これはメッセージに関しても真実です。オックスフォードの神学部で第一級の賞

を与えられた、とても有能で若い説教者のことですが、彼は一人のかなり年配の立派な説教者と一緒に説教したときのことを話してくれました。自分より若い説教者が三、四人話すのを聞いて、その年配の方は彼に言いました。「なるほど、あなたはたいへん立派な血統の牛を市場に連れてきたが、残念なことに骨や骨格がずいぶん現れていて、充分肉が付いていない。人が市場に行くのは骨を買うためではなく、よく食べて太った家畜の肉を買うためだ。肉屋で買いたいのは骨ではなく肉のほうだ。」会衆に諸々の事実や思想や骨子をただ投げ与えてはいけません。その骨格に肉づけするのに充分時間をとらなければならないのです。

以上のことは原稿を持たない説教の場合のおもな危険についてですが、次にメッセージを書き出す場合の危険性を考えてみましょう。書き出す理由は骨子に肉づけするためですが、ある種の危険やわなが生じます。その第一として凝った文体を用いたがること、つまり文学的性格や要素に過度な注意を払うことです。これは説教の歴史という観点からすると非常に興味深いことです。この点に関してキリスト教の説教者は幾つかの過程を経験したように思われます。

例として多くの点で偉大な十七世紀に起きた事柄を取り上げてみましょう。この世紀の初めに英国国教会にはいわゆる古典的説教者が幾人かいました——アンドリュース主教、有名なジェレミー・テイラー、そしてジョン・ダンにまで至ります。これらの人は偉大な説教者と見なされ、喝采を浴びました。多くの点で彼らはそのような人たちでしたが、当時のピューリタンが

明確にそうであったように、彼らもまた極端にある方向に走ったと思われれます。つまり彼らのメッセージは芸術品になっていたのです。それらは文学的傑作であり、完璧な構成で、古典的、文学的引喩や引用が随所に点在していました。でもその結果、一般の人々はあまり救いの真理や聖書のほんとうの意味を知らず、ただ完璧で華やかなメッセージを楽しむために出かけたのです。そのようなメッセージを聞くことは文学的、美的な饗応であったのです。

これに対してピューリタンはたいへん反発しました。しかも非常に慎重に。すべてメッセージはみことばの真理を「宣言」するためにあるのに、そのような非の打ちどころのないメッセージは、実際みことばの真理を「覆い隠す」ことになると思われ、彼らは感じたからです。要するに形式が内容をしのいでいたのです。たぶんこの点を理解する最良の方法は、もつとも偉大なピューリタンの一人、トマス・グッドウィンのことを話すことだと思います。トマス・グッドウィンは生来の雄弁家で、彼がケンブリッジ大学の学生だった頃、その大学である有名な演説家であり、雄弁な説教者でもある人の語るのをよく聞きました。トマス・グッドウィンは彼を賞賛し、この人こそ説教者として彼の理想としたのです。それでグッドウィンは彼とそのやり方を模倣しました。しかし、真の回心がいつもそうであるように、彼はものの見方を徹底的に変えられてしまふ深遠な信仰的体験をしたのです(Ⅱコリント五・一七)。この結果、彼には自分の説教に関してとても大きな葛藤が生じました。回心して間もなく、彼は大学で説教を頼まれ

ました。もちろん、直感的に彼が大いに賞賛する古典的方法で準備し、書き出したのです。その着想を得たときには身体が震え、感動を覚えたすばらしい華美な章句と文学的潤色とがある一つの見事なメッセージを生み出し、それらを書き出しました。しかしそのとき、神の御霊と彼の良心とが内側で働き始めました。そして彼は恐ろしいほどの葛藤を経験したのです。どうしたら良いだろうか。彼はその会衆には大学の学識者たちばかりでなく、幾人か普通の人やしばしば教育のない女性の雇用人もいることを知っていたからです。そこでトマス・グッドウィンが気づかされたことは、ほかの人々と同じく、そのような女性の雇用人にも説教しなければならぬことでした。またそのような華美な章句は普通の人々には何の意味もないばかりか、障害にさえなりかねないことを彼は知りました。どうしたら良いのだろうか。彼の心は傷つき破れんばかりになって、ついに彼はそのメッセージから華美な章句を取り除き、まったくそのことには触れなかつたのです。みことばの真理のため、福音の伝達のため、そして人々の魂のために彼の行ったことは正しかったのです。充分訓練を受けずに文学的形式に関心を払うことは、飾りつけた技巧的な様式となつてしまい、真の説教をだめにしてしまいます。

今日も確かにこの傾向があり、その証拠も多くあります。一八四三年にスコットランドで起きた教会分裂に関する記事を一九四三年か四四年に読んだ記憶があります。著者は偉大なトマス・チャマーズのことを扱い、彼の説教を批評したのですが、チャマーズの説教には文学的、

歴史的な言及がないのが非常に残念である、というのがその内容でした。説教の労苦も知らず、何事も成し遂げなかつた凡人が巨人を批評したのです。それにしても何という批評理由でしょうか。説教の眞の機能について何と無知でしょうか。

別の観点からそのことを述べます。今世紀の初頭、英国国教会にヘンスリー・ヘンソンという名の主教がいました。彼は『つまらない人生の日記』という題で二巻にわたる自叙伝を書きました。その中で、彼はあるとき、特別な機会に説教しなければならなかつたとき、一つの説教を書くのにどのよう三週間を費やしたかが記されてありました。ある部分を書き直してはほかの部分を変え、またいろいろと付け加え、彼がその三週間、いかに産みの苦しみをしてこの完璧なメッセージを産み出し、磨き上げたかを私たちに教えているのです。

しかし、聖書そのものにある説教や教会の歴史で偉大な時期を特徴づけた説教を見ると、以上のことは確かに福音の説教とは調和しがたい事柄です。語句を練つたり、あちこち言葉を変えたりすることとみことばの眞理と何の関係があるでしょうか。形式は必要ですが、それ以外な注意を払つてはいけません。パウロが一つのメッセージを準備するのに語句を練り、あちこち言葉を変え、別の形容詞を挿入したり、機知に富んだ名句を加えたりして三週間も費やすことなど考えられるでしょうか。まったく信じられないことです。「ことばの知恵によつてではなく」、また「人の知恵に教えられたことばを用いないで」(英欽定訳)と使徒は述べてい

ます。何と容易に私たちは極端から極端に走るのでしょうか。ですから私たちは常に、こうした過度に飾り立てた様式を避けるよう注意しなければなりません。おそらく今日では以前ほど危険は大きくないでしょう。なぜなら人々は以前ほど説教に興味を示していないからです。しかし私が確信していることは、前世紀末から今世紀初めにかけて文学形式や礼拝式の完璧な形式に過度な注意を払つたことが説教と説教の事由とに嘆かわしい害悪をもたらしたことです。

以上の事柄はさまざまな引用文を用いる問題にも連なっています。これらはまったく必然的にかかわり合つていて、難しい事柄です。確かに今日ではこれは先の問題よりも深刻です。私たちは以前より多く教育を受け、会衆も以前より学識があり、より良い教育を受けて多くの知識を持つていると考えるからです。そこで誘惑となるのは、学識者であることの証拠はどれだけさまざまの引用文を用いるかによると考えることです。特に書物の場合がそうであるのは周知の通りです。人が学者であるか否かは何で決めるのでしょうか。答えは簡単で、用いられる脚注の数です。もし脚注がなく、ほかの著者に関する言及が多くなると、そこからの引用がなければ、彼は学者でも思索家でもないのです。そしてその逆もまた真だと言つては、もちろんこれは馬鹿げています。私たちが関心をいだくべきことは人間の心の資質や思考能力やその人の独創性であつて、脚注の数ではありません。しかし、それが現在の傾向なのです。でもこれが説教となると致命的な脅威となります。と言つてもこのことほど眞の説教に不利に作

用することはほかにないからです。

なぜ私はこんなことを言うのでしょうか。答えの一つは、引用文を用いるほんとうの目的は自分の学識を示して、注意を自分に向けさせるためであってはならないからです。もしそうならばその動機はまったく誤っており、引用文は一つもないほうが良いでしょう。英国で数年間、大衆説教者としてかなり名声を博したある神学大学の学長を覚えていますが、ある日彼は二月ほど後にラジオで説教するよう依頼されました。そこで彼は直ちに宗教上の韻文に関するオックスフォード読本や類似した書物を読破したのです。何のためでしょうか。メッセージを始めるための際立った引用文を見つけるためでした。彼は自分でそれを行っただけでなく、お気に入りの学生たちにも同じことをさせたのです。彼は自分のために彼らにそのような詩を読ませました。彼は主題を何にするか学生たちに話したので、彼らはメッセージの冒頭に使う、印象深く際立った引用文を見つけ出さなければなりません。当時、私にそのことを話してくれたのはこれらの学生の一人でしたが、これを一言で言うならまったくの墮落行為です。しかも引用することの濫用でもあります。なぜそれが悪いのでしょうか。再度述べますが、形式が内容よりも重要になっていくから間違いなのです。形式は内容の僕となるべきものです。

以上の事柄に関して非常に感銘を受けた言葉を覚えています。ある筆者が「芸術的技法の巧妙さと芸術の必然性」と称する事柄に境界線を引こうとする記事を読んでいたとき、そこに完

璧にこの事柄が言い表されていたのです。芸術的な手腕は技巧に依存するというので、芸術的な効果を生み出そうと労苦し奮闘する人を見かけるが、一方、真の芸術家の作品を特徴づけるものは常に「必然性」——ほかのものにはできないと感ぜられること——にあるということなのです。前者には何か人為的なものがあります。それが技巧です。自分の目的に役立つ効果を造り出そうとするのは常に退廃した人々の特徴です。私たちは決してそのような轍を踏んではなりません。常にこの「必然性」という特質がそこにあることを確かめなければならないのです。

この問題に規則を定めるのは私のすべきことでありませんが、概して引用文を記載した本を用いるのは避けたほうが良いでしょう。それらの本を利用して良い場合と言えば、引用した事柄が正確かどうかを点検したり、分らなくなった言葉や語句を見つけ出す際の助けとなる場合だけです。それによって時間の無駄を省けるからです。換言すれば、引用文を見つけたいため引用文の中から特定の見出しを取り出すことはすべきではありません。むしろ考えたり書いたりしているときに、どこかで読んだ事柄や学校で学んだ事柄が心に浮かんだので、その言葉や著者が正しいかどうかを本で確かめるようであればなりません。本から始めることは人為的・機械的であって、いずれにしても自分の働きに対する怠慢です。

ですから私は引用文のことは考えなくてもよいとさえ言いたいのです。引用することによって説教に対する取り組みが機械的であることがあまりにも明確になり、突出したものとなるか

からです。言い替えるなら、引用は自分の心に浮かんたり、必然的と思われるときにだけ用いてください。つまり引用文によって自分の語ろうとすることが完全に表現されると思えるときや自分が語るよりも上手に表現されていて、ほとんど完璧だと思われる場合입니다。あなたは私があまりにもこの点を問題視していると思うかも知れませんが、そうではありません。一つのメッセージに引用文があまり多いと、聴衆はうんざりします。ときには馬鹿げていることさえあります。私はある日、オックスフォードで詩歌の教授で牧師でもある人と話したことがあります。私たちは実にこの問題を話し、引用の仕方が馬鹿げている場合のことを話しました。そのとき彼は、その前の週にロンドンのウェストミンスター聖堂でメッセージを聞いたときのことを話してくれました。博学なその説教者はおびただしい数の引用をしたのです（書物に対する造詣の深さを示そうと）。それで実際その説教では、次の一つの要点しか語られなかったそうです。「最近、エブリン・アンダーヒルが私たちに思い起させてくれたように、神は愛です。」何も言う必要はないでしょう。何事も引用の形式で始めなければならぬと言わなければ、それによって私たちは真理を覆い隠してしまい、説教者は自分を愚か者とし、会衆を欺く立場になってしまふのです。

メッセージはそれが説教者を通して伝達される時、神の真理の宣言となるべきものです。会衆は他人の考えたことや述べた事柄を聞きたいと思つてはいません。彼らは神の人であるあなたが語るのを聞きたくて来るのです。あなたはこの働きに召され、按手を受けています。そして会衆はあなたを通し、あなたの全存在を通して語られるこの偉大な真理を聞きたいと思つているのです。あなたの思想を経て、あなたの経験の一部となつている事柄に期待しているのです。彼らは信頼できるこの個人的な注釈を望んでいます。もしあなたのメッセージがただ引用の連続であるなら、分別のない人たちは「何と学識のある人だろう」と言うかも知れませんが、ほかの人々やそこに居合わせた説教者はあなたが何をしているか分るでしょう。しかもあなたの説教には何の力もないのは間違いないでしょう。それは私が保証します。ただ「だれだれが言った」とか「だれだれが私たちに思い起させてくれた」という内容から成り立つメッセージに力はありません。次から次とそのような声明が語られると、彼の読んだものが彼の考えになつているのだと感じさせてしまいます。しかし、私たちは自分で考えなければならぬ立場にあります。読書はすべて思考を刺激し、ある量の情報を提供するためのものです。

さて、次に警告しておきたい事柄は——特にメッセージを書き出す場合ですが——あまり綿密な論証には注意を要することです。最初にメッセージの概要を述べたとき、その論証、展開、そして結論の重要性を強調しました。しかし論証をあまり綿密にし、その表現に技巧を凝らし、複雑にははいけません。なぜならメッセージは口を通して語られるので、聞く側は読書の場合のようあまり綿密な理論について行くのは容易ではないからです。ですから、その

点であまり極端になると会衆が真理を受け入れる妨げとなります。これは原稿を持たない説教にも適用されますが、特に書き出すメッセージの場合に危険性を感じます。

次の事柄を述べて終ります。準備をしてください。しかし、過度な準備をする危険性にも気づいてほしいのです。特にメッセージを書き出す場合にはそうです。危険なことはあまりにも完璧にしようとする事です。あなたには理想があり、自分の行おうと思うことを知っています。でも危険なのは準備が過ぎて、メッセージそれ自体が目的となってしまうことです。これを避けるにはどうしたら良いのでしょうか。矯正方法は何か。簡単です。終始、自分の行っていることは会衆のため、すべての人のためだということを自分に思い起させることです。あなたは教授や物知りのためにでなく、さまざまに混じり合った会衆のためにメッセージを準備しているのです。会衆として集まるすべての人の助けとなることがあなたの務めであり、また私の務めです。それができないなら失敗です。ですから過度に学問的、神学的な方法は避け、実際的であってください。そして会衆を忘れないでください。あなたは彼らに対して説教しているのですから。

例話、雄弁、ユーモア

ここで原稿を持たない形式の説教とその準備について扱いますが、話すべきことはそれほどなく、危険となる点も多くはありません。ただ強調したいことが一つあります。それは私自身の経験の結果として語るのですが、これまでは頻繁にメッセージを書き出したのを、さまざまの理由でそれをやめて原稿を持たない説教者となる場合に生じる危険です。これが直面する最大の危険は不十分な準備で満足するようになることです。要するにメッセージを全部書き出さないので、ごく簡単なアウトラインや骨子を用意するだけで良いと直感的に受けとめてしまうことです。その結果、講壇ではまったく悲惨なものとなる可能性があります。聖書を読んでいるときにある考えが浮かび、急いでそのメッセージのアウトラインを記すとそれでもいろいろな考えで満たされてしまったかに思え、語るにも何の困難はないだろうと感じるのです。しかし悲しいことに、二、三日後とか二、三週間後にそのアウトラインを持って講壇に立ち、いざ説教しようとする、考えたことがごとごとく自分から離れ去っていて、語ることに

ほんのわずかしかないという事態がしばしばあります。語ろうとしても与えられたものを再び捉えることができず、一体どうしてこんなさまざまな見出しを付けられたのかといぶかしくさえ思うのです。最初は明らかに意義深かったのに、いつの間にか消え去っていたのです。

この危険に対処する方法はまったく明瞭だと思えますが、あなたがこの問題にまだ気づいていないなら、私のように痛い経験を通して学ばなければなりません。要点やおもな見出しを幾つか抜き出し、それに多くの従属的、補足的な見出しを作り出さなければなりません。あなたは語るべき十分な題材や素材があることを確かめる必要があります。主要な見出しを入念に作り、さまざまな方法でそれを例証するようにします。以上の点に充分注意して書き留めてください。骨子の点で忠告したように、紙に書き記す重要性をもう一度強調します。それは実際説教するとき、その主題で何を話したいかを思い起すためです。原則は準備をあまり短くしないことです。補足的見出しに關してもできるだけ多くのメッセージを作ってください。そうすれば語るべき事柄で不足することはないでしょう。すでに述べたように、多くの説教者はテキストが突然自分に語りかけたときに生じた靈感に信頼し、實際講壇で説教するときにもそのことが再び起きたので、その後も常に同じことが起ると考え、注意深い準備は必要でないと考ええる愚かな誘惑に陥りました。しかし、経験によつてその誤りを悟るようにはなれます。

さて、説教する際に働くもう一つの要因については、私の知る南ウエルズのある牧師のことを話すのが一番良い例証となるでしょう。それは人の靈的経験には時節や浮き沈みがあることを示しているからです。その説教者は一九〇四年から五年にかけてウエルズの信仰覚醒とリバイバルですばらしい経験をしました。彼は有能ですぐれた学生でした。リバイバルは彼が学生のときに起き、彼もほかの学生たちも大いに影響を受けました。どのリバイバルにも共通することですが、人々は語ることや祈りや説教に異常な容易さと能力が与えられます。当時のウエルズの教職者の証言によれば、彼らは説教の準備にほとんど時間を用いなくても良かったそうです。何もかも与えられているように思われ、話すことも豊富にあり、心は満たされてクリスチャンの喜びと主に対する愛のゆえに、何の困難も制約もなく語ることができたのです。しかし、そのような時期が終り、リバイバルが収まるとき、しばしば問題が生じます。当時の多くの人はそれが例外的時期であつて、教会生活がより平常な時代にはもつと多くの準備が必要であることに気づかなかつたのです。私は、いろいろな理由はあつても、この特殊な落とし穴に落ち込んだ大勢の人を知っています。中にはメッセージを準備することは罪だとさえ感じた人もいました。彼らはあのすばらしい自由と解放を体験したので、それがやんだとき、御霊を悲しませたとか御霊を消してしまつたと感じ、靈的障害どころかほとんど精神障害にかかつた人たちもいたのです。また自分の気づかない何らかの罪があるに違いないと感じる人たちもいました。なぜ彼らはかつて享受したあの容易さや流ちょうさが与えられなかつたのでしょ

うか。私の知る人々にはその靈的なスランプから脱却するのに多少助けを必要とした人たちがいて、幾つかの場合、實際靈的な領域から精神的な領域へ越えてしまった場合もあります。

ところで私が考察している人の場合、以上の事柄が彼を障害に至らせたと理解するのは間違いで、彼の問題は「御霊を悲しませた」という恐れよりむしろ説教の準備をしなくて良い靈的根柢があると考えたことにあります。彼はリバイバルの間準備をする必要がありませんでした。しかしリバイバルが終ったとき、同じように続ける靈的正当な理由があると感じたのです。それは詩篇八一篇の「あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう」というみことばでした。彼はそれを準備なしで講壇に立つても語ることが与えられるという意味に解釈したのです。氣の毒にも文字通りそのように行いました。その結果彼は教会を空にしてしまいました。しかしほんとうに悲劇的なのは彼は高い靈性を持つとても有能な人であったことです。

ですから、もしあなたがメッセージを全部書き出さないなら、このような落とし穴に落ちないよう気をつけてください。自分の語ろうとすることを最初から最後まで心の中で覚えるまでできるだけ完全に準備してください。これはいくら強調してもし過ぎることはありません。私の経験でも多少役立ち、価値あるならばと考えて伝えるのですが、私の場合は続けるにしたがい、書き込むことが短くならないで、むしろ詳しくなる傾向があります。むろん、すべてこうした事柄には多様性があります。

二つの主要な方法——メッセージを全部書き出す方法と原稿のない場合にメモ書きを用意する方法——のほかに、これらを変化させて用いる人たちがいるのも事実です。私はそうしたやり方が間違っているとは全然考えません。私の知っている人々には導入部とメッセージの終りをほとんど全部書き出し、中間の部分は骨子やメモ書きに頼るとい人もいます。しかしその方法には話さなければならぬことが多いです。特に説教を全部書き出す方法から原稿を持たない説教方法に変えようとする場合です。移行の過程ではそのやり方は役に立つでしょう。講壇に立つて用意したアウトラインにしたがって話そうとするとき、突然導入部でつまづくことがあるので導入部だけを書き出す人々もいます。出だしが上手でなかっただけで気が動転して全体がだめになってしまうことがあるからです。ですから変り目にこれを直すためには導入と結びの部分を書き出すことです。

＊

＊

さて私たちはメッセージを実際に語る際に生じるさまざまな事柄を考察しています。講壇に立ち、初めから終りまでメッセージを読む人もいます。あまり独善的な発言をするつもりはありませんが、それは確かに間違いで悪いことでしょう。しかし過去の歴史を引用すれば、その方法で大いに祝福を受けた顕著な事例を私は幾つか知っています。しかし例外的な事柄から原

則を定めることはできません。先の講義で見たように、説教には確かに会衆と説教者との間の直接的な交流、すなわち人格、精神、心の相互作用があります。つまり「ギブアンドテーク」の要素があるのです。それで説教者が会衆を見るのは良いことです。でも会衆を見ると同時に原稿を読むことはできないので、原稿を読む方法は自分にも会衆にも悪いことです。会衆の注意をそぎ、彼らの心を捉えることができなくなります。会衆もあなたの語ることを把握できなくなるでしょう。そこで定義をするなら、確かに説教は直接的、個人的方法で会衆に語りかけるスピーチですが、理論的なまた学問的な講義のようなものではなく、それには生きた交流があるのです。ですからそれを失わせるものは何であれ悪いのです。説教を読む方法で祝福を受けてきた説教者を幾人か知っていますが、説教に関して規定されるどの原則にも例外はありません。しかし、それが原則を損なうことはありません。会衆に説教しながら、メッセージを読まないときには建物の窓から外をながめながら語る人がいます。むしろこれも良くないことです。原稿を読んでいるほうがまだましです。また、自分は靈的に高い事柄を扱っているのだ——見えざる深淵を垣間見ている偉大な神秘家だ——という印象を与える人たちも知っています。

また多くの説教者がするように書いたメッセージを暗唱するのは悪くないにしても、あまり良くないでしょう。でもそれを話したり伝えたりするとき、会衆を見ることができるので、まだ良いでしょう。メッセージを書き出してそれを何度も読むうち、記憶力が良ければ、その大

部分を容易に覚えてしまうので、そうする人も多くいます。それも悪くはないのですが、私は好きではありません。そのおもな理由は説教者を束縛するからです。つまり自由の要素を妨げてしまうのです。暗唱したものを語るときあなたは、実際会衆と触れ合っていないのです。暗唱した事柄に集中していて、それを思い起すのに懸命になっています。しかもそれがあなたとあなたが語っている会衆との関係となつていっているのです。そこでは生きた要素が減ぜられ、機械的要素のほうが多くなっています。これはたいへんに難しい事柄で、多くの説教者も実際に経験しなければならず、ときにはやり方を変える必要があります。

ところで私はいつも世間一般の演説——政治的演説でも良いのですが——で引き出される特質は説教の段階でも効力があると考えています。修辞学と雄弁術との間には相違があるでしょうが、その相違は何でしょうか。私がこれから指摘する事柄は確かにその相違を明確にしています。修辞学者には自分の準備したものが頼りで、彼は注意深く準備したものを宣言します。最近の歴史でもっとも顕著な例は故ウィンストン・チャーチル卿でしょう。よく雄弁家と呼ばれますが、彼は雄弁家ではなく、修辞学者でした。父のランドルフ伯爵は雄弁家でしたが、ウィンストン卿は決してそうではなかったのです。若いときは演説のすべての言葉を書き出し、暗唱してからそれを演説しました。後年、彼は読むようにしましたが、若いときには暗唱したものを話したのです。この方法は話す者と聞く者との間に絶対必要な触れ合いと交流とを妨げ

ます。彼の場合がその例でした。反対者たちは彼が暗唱することやすばらしい記憶力があるのを知って、よく彼の妨害をしました。それで彼は平静さを失ってしまい、演説を自分が暗唱できるところまで戻ってからでないと先に進めませんでした。言い換えると、彼は修辭学者だったので原稿に束縛されていたのです。しかし雄弁家は常に自由であって、いつもその聴衆に負うところが大きいのです。そこにはいつも生きた交流——眞の取り引きが生じるのです。

このことは説教にもあてはまりません。説教者は修辭学者であるより雄弁家であるべきです。メッセージを暗唱してそれを語り、宣言するときには何かが失われています。

次にしばしば用いられるので述べたいのですが、それは書き出したメッセージ全体をメモ書きにする方法です。暗唱する代りにメモ書きにする方法です。これはメッセージを書き出し、心の中でその要旨をとらえて後、メモ書きにしてそこから説教するのです。このやり方は先の二つの方法よりはるかに大きな自由を獲得できるでしょう。再度述べますが、これは特に書き出す説教から原稿を持たない説教に移行する段階の人には有益です。大切なことは自由です。これはいくら強調してもし過ぎることはなく、それは説教の働きの本質そのものです——心と霊における自由、あなたに対する御霊の影響力に自由であることです。御霊を信じているならば、この重大ですばらしい働きに携わっているときにもこのお方が力強く働いておられると信じなければなりません。ですから私たちはこのお方の影響力に心を開いている必要があるのです。

もちろん多くの結果が生じる可能性があります。説教の形式が不完全になったり、文学的見地からすれば悪くなるかも知れませんが、会衆とは良い交わりができるでしょう。学者ぶる人たちは使徒パウロをその破格構文のゆえに非難したのではないでしょう。文章を始めてもすぐに主題からそれてしまい、主題を語り終えずに終わっていると彼らは指摘しますが、それこそ自由、御霊にある自由なのです。試験であれば、おそらくパウロはあまり良い出来ではなかったかも知れません。しかし御霊が彼を用いたのです。私は文章は不完全でも良いと言っているのではなく、あなたはあくまでも自由であるべきだと言っているのです。御霊があなたを捉えて導こうとするなら、導かれるままにしてください。束縛され、拘束されてはいけません。

すべてこうした事柄のゆえに落胆してはいけません。経験を通して学ぶという必要のなかった説教者は一人もいなかったのですから、がっかりしないでください。最初、メッセージを全部書き出さなければ説教できないなら、そうしてください。しかし私が指摘した方法で試みてください。書き出すのは一つのメッセージにして、ほかはそうしないでください。さまざまに修正したり、変化させてみてください。とりわけ自分にいらだつてはいけません。たまたま礼拝でうまく行かなかつたと落ち込んだり、全部を書き出した原稿なしには二度と講壇に立つまいと言っははいけません。それは悪魔の声ですから耳を傾けてはいけません。自分は自由だと知ることのできる段階まで続けてください。このことをあまりにもはやしてはなりません、

私たちには御霊に信仰を置くより自分たちのメッセージに信頼を置くという、たいへん実的な危険があるのです。私たちの信頼はメッセージではなく、聖霊ご自身にあるべきです。ですからいつでもどこでも、終始この自由を確かなものとしてから会衆と交わりましょう。

ここでは書き出したメッセージであれ、原稿を持たない説教であれ、これらの両者に共通する事柄を扱います。このことでは人々がよく私に尋ねてはいろいろ発言したり、批評をしたからです。まず物語や例話を用いる場合の問題に触れますが、これには注意を払わなければなりません。例話を用いることとみことばのある箇所を靈的に解釈することとの相違は私たちには理解できていると確信します。聖書の誤った、偽りの靈的解釈は弁護しません。また説教の講義ではないのであまり事細かに追及できませんが、私は聖書についての間違った偽りの靈的解釈を提唱するのではなく、旧約聖書の出来事を靈解することとそれを単なる例話として用いることには相違があることを明らかにしたいのです。その相違とは以下の点です。もちろん、まずあなたは自分の行っていることを人々に明らかにしなければならず、語る事柄も明確にしなければなりません。つまりこの特定の出来事が歴史の領域で起き、これと同じ原則を靈的な領域でも見出すことができること、またその可能性があることを明らかにするのです。

一例を挙げましょう。かつてリバイバルについて講義したとき、イサクが「彼の父アブラハムの時代に掘った井戸」を再び掘ったが、それらはペリシテ人がアブラハムの死後ふさいでい

たものであるという物語を取り上げました。私がそれを取り上げたので、その出来事に何か靈的解釈を与えるのではないかと考えた人たちもいました。なぜなら彼らは例話としてある物語を用いることとそれを靈的に解釈することとの相違に気づいていなかったからです。もし私がその出来事を靈的に解釈したなら、私はイサクがそのとき何か靈的な事柄をしたと主張していることになったでしょう。でも私はただその物語を例話として用い、イサクが水——生命と肉体の健康にとって欠くことのできない普通の水——に関して行ったことはリバイバルに関する靈的領域でも価値ある原則を图示してくれる、と指摘しただけでした。イサクが何か靈的な事柄を行ったのではなく、彼はその所に水があるのを知っていたので、新しい水の供給源を見つけるのに探索者を遣わして時間を浪費することをせずに、古い井戸を再度掘り返した。このように靈的な領域では、困難や靈的荒廃のときに新しい「福音」を求めて時間を浪費するのではなく、「使徒の働き」や教会の歴史におけるすべてのリバイバルの時期に戻ってみることは私には知恵の本質のように思われる、ということを示したのです。ですから今述べたことは古い出来事の靈的解釈ではありません。私はフィクションや世の歴史の領域で例話や物語を捜すこともできましたが、旧約の出来事を例話として取り上げただけです。ですからそれは靈的解釈ではなく、私もイサクの行ったことがリバイバルにつながったとは述べませんでした。しかし、自分の行うことを注意深く説明することは大切です。一般にあなたの会衆はこのことを容易に

理解するでしょうが、誤解しやすいのはむしろ「専門家」と呼ばれる人や学者ぶる人だけです。

一般的な物語や例話のことに戻りますが、ほんとうに悪いと思われのは「説教例話の技法」などという題の本に書かれてあるような事柄です。それは私には忌むべきものです。「技法」というのはこの霊的領域ではまったくなじみません。それは墮落です。私の知る一人の説教者はいつでも小さなノートポケットに入れて、良い話を聞くといつもそのノートを取り出しては記録します。そして家に帰ってから全部を書き出し、それを書棚のファイルにしまっておくのです。ある主題には良い例話になると思うからです。それで彼はいつもさまざまな話を集めては区分けし、種々の項目に分類してファイルに収めておきました。ある主題でメッセージを準備するときには適当なファイルを引き出し、必要な話を選んだのです。彼はほかの人々にも同じようにするよう説得したのです。

しかし、こんなことは私にすると最悪の職業気質にあたります。なぜなら人々を誘惑するのに過度の注意と関心を払うからです。もちろんさらに悪いのはほかの説教者の話や例話を無断で利用することです。これよりさらに悪いのはそうした物語を見つけるためにメッセージの本を買いあさることです。

なぜ反対するかと言えば、物語や例話それ自体が目的となってしまうと感じるからです。物語や例話はそれ自体決して目的となるべきものではありません。よく気づくのですが、あまりにも自由にそれらを用いると聞く会衆の世俗性を助長するのです。ある所で説教したとき、一人の牧師が礼拝後私のところに来て言いました。「メッセージを感謝します。でもこのたびは例話を全然用いませんでしたね。」私は、「この人は一体何のために聞いていたのか」と考えさせられてしまいました。前回のとき彼は私の語るのを聞いたのです。確かにそのときいつもより多く例話を用いたことを思い出しました。しかし今この人はみことばの真理ではなく、例話を聞きに来たとしか私には思われませんでした。これは重大な倒錯ではないでしょうか。

つまり物語や例話は真理を例証するためのものであって、物語や例話そのものに注意を払わせるためではありません。この百年間、例話や物語の持つ働きが格別忌むべきものとなっていきます。私はそれが説教の衰微を説明する一つの要因だと確信しています。なぜなら、説教とは技巧であり、それ自体が目的なのだという印象を与えるのをそれらが助長したからです。自分の身に起きたことや何かで読んだすばらしい例話を使いたければかりに、実際それに合う説教を準備した人が多くいたのも疑いのないことです。例話が第一義となってしまう、それに当てはまりそうな聖書箇所を捜すのです。言い替えると、事の中心が例話となっていたのです。しかし、それは順序が逆です。例話は真理を例証するためのもので、それ自体目立ったり、注意を向けさせるものではありません。あなたが言明し、宣言する真理を会衆が一層明瞭に理解できるように導き助ける一つの手段です。ですから原則として常に真理が傑出し、大いに卓越したも

しかし説教者はみことばの真理そのものを布告し、宣言するために講壇に立つべきです。これこそ際立つべきことであり、それ以外はこの目的に仕えるものとなるべきです。例話は僕に過ぎず、控え目に注意深く用いるべきです。何年も説教者の語るのを聞き、自分自身も説教し、絶えずこれらの問題を論じ考えてきた結果として述べますが、もしあなたがメッセージの中で多く例話を用いるなら、効果の薄いものとなるでしょう。絶えず例話を用いるのは緊張感を失わせてしまうからです。ちよつと話しては「こんな話があります」と例話を出し、さらに少し話すとまた例話を持ち出す説教者がいますが、これは主題やみことばの真理が強く迫るのを絶えず中断することになります。つまりそれはスタッカートとなり、結局、偉大で栄光あるみことばの真理を宣言したと感ずるより、むしろ食後のテーブルスピーチか余興でも聞いたような感じがするでしょう。もしそんな説教者が評判となり、それが頻繁に行われるなら、それは悪い意味で人気があるだけです。なぜなら彼らはほんとうに大衆芸能人に過ぎないからです。

物語や例話について述べておきたいもう一つの事柄は、それらを用いる場合、その真偽を確かめることです。私が医療に携わっていたとき、あるメッセージを聞きましたが、その中で説教者は一つの例話をかなり詳細に長々と展開したのを覚えています。彼の要点は罪人の愚かさ、良心やそのほかの初期の警告に注意を払おうとしないことである、ということでした。彼はこのことを一週間前に葬儀をしたある女性に関する話として、実に入念に例証したのです。彼

のとなるようにし、例話はその目的のため最小限、注意深く使用されなければなりません。私たちの働きは会衆を楽しませることでないのです。しかし、会衆は物語や例話が好きです。私は今もってなぜかよく分らないのですが、会衆は自分の家族のことを話す説教者をいつも好むようです。でも私はそれを聞くといつもうんざりするのです、それを好む説教者のことが理解できません。確かにこれには多く意見のあるところですが、なぜ人々はほかの子供より説教者の子供のほうに関心を持つのでしょうか。彼らにも子供がいるので、その話を自分たちで上手に増幅できるからでしょうか。この論点は一般的に「個人的触れ合い」をもたらすことにあります。一人のロンドンっ子が私に次のように言ったのを思い出します。彼はある説教者がロンドンを訪れるときには必ず聞きに行くそうで、この説教者は年に一、二度、地方から来るということでした。ある日このロンドンっ子に会ったとき、彼は私にこう言いました。「先週の日曜日、私は某博士の語るのを聞いたのですが、ご存じのように彼がすばらしいのはいつも彼自身の性生活のことを私たちに分ち合ってくれることです。」定かではありませんが、彼は私も同じようにすべきだと言いたかつたのでしょうか。

ところで以上のことはある人たちが好みまた幾人かの説教者が実際行っていることです。しかし、それが大勢の会衆の中でいかに低俗で最悪なことを助長するかはよく分るでしょう。それはまったく肉的事柄であつて、人々の個人的な事柄を知りたがる一種の欲望や欲求です。

女には片方の胸部にガンがあったのですが、医者のところに行ったときはすでに背骨や身体のほかの部分にも転移して広がっており、癒されるにはもう手遅れの状態でした。この女性にとって何が問題だったのでしょうか。そこでこの説教者は「さて、この女性の悲劇は最初の激しい痛みが彼女が注意を払わなかったことです」と語りました。医者として聞きながら、私には彼の語ったことはまったく馬鹿げていました。その種のガンの難しさは、それがかなり広範囲に進行するまで痛みがこないことにあるのです。それは潜在的に静かに広がるのです。気の毒にもその女性にとって問題だったことは、彼女が痛みを無視したことではなく、おそらく彼女が感じたと思われる小さな腫れものを気に留めなかったことでした。その見事な例話も彼が自分の語る事柄の事実を知らなかったため、私にはだめなものとなりました。

私たちはしばしば自分の語る事柄の正確さや事実を確かめず、科学的な例話を用いてはこのような誤りを犯します。自分のよく知らない事柄の領域に立ち入る場合には十分な注意が必要です。「ダイジェスト版」や新聞などを読んで、ある特定の事柄についてすべてを知ったと考えてしまい、大胆にも例話として用いることがあります。しかし、ダイジェスト記事を書く人もよく分かっておらず、科学者というよりジャーナリストである場合が少なくないのです。これが説教者の場合には一層悪いものとなります。科学的知識のある人があなたの語るのを聞くなら、あなたの語るみことばの真理の正当性を疑い始めるでしょう。彼はあなたを注意深い人で

ないと感じ、彼の知っている事柄をあなたが取り扱ったと同じようにみことばをも扱っているなら、心して十分な時間と注意とを払ってまで聞くに値しないと感じてしまいます。ですから物語や例話を用いる場合には特に事実関係に注意を払ってください。

＊

＊

さて、私たちはメッセージやそれを説教する場合の想像力という事柄について、多少考慮しなければなりません。もちろんこれは先の主題に関係しますが、やはり異なっています。想像力に関しては、今日、一時期に比べてそれほど危険ではないと感じます。私たちのだれもが科学的になって、想像力のはいり込む余地がほとんどなくなっているからです。しかし、私にはこれはとても残念なことと思われれます。と言うのは説教にとって想像力はたいへん重要で有益だからです。それが危険になりうることを十分に認めますが、想像力も神からの賜物であることを忘れてはいけません。もし想像力という賜物がなかったら、詩人も存在しなかったでしょう。もしあなたがあらゆる形態の文化が主イエス・キリストのために獲得されたと信じるなら、想像力をさげすんではいけません。未信者だけが想像力を用いるべきでしょうか。いいえ、想像力はみことばの真理を説教することにこそその存在価値があります。なぜならそれはみことばの真理を鮮やかに、生き生きとしたものとしてくれるからです。むしろ度を超すなら

危険となります。これまでも見たように、説教の領域ではすべてが危険で、想像力を用いるのは特に危険です。私にはいつもこの想像力が説教することに関してもっとも大きな問題の一つとなつていきます。一部は国民性によるのかも知れません。説教することにおいて国民性とは何でしょうか。クリスチャン生活において国民性や気質とは実際どのようなものなのでしょうか。教論において国民性や気質とは何でしょうか。つまり神学において国民性や気質とは何でしょうか。この想像力という点に関してはとても簡単に本題をそれてしまうのです。

一体なぜこれが私にとって大きな問題かという理由の説明はさておき、私はこの問題の本質をはつきり理解しています。ただ危険なことは想像力が飛び抜けて有益である限度を容易に超えてしまい、それ自体に注意を引きつけさせ、その源であるみことばの真理とのつながりを失つてしまうことです。結局、それは想像したこと、すなわち自分の想像力で知った事柄を言明し、それがみことばの真理よりも人々に影響を及ぼすのです。

歴史上にこの顕著な例を見出すのは困難ではありません。明らかにジョージ・ホイットフィールドには格段にこのすぐれた賜物が与えられていました。ところで説教の歴史や説教者の伝記を読むと、一般にすぐれた説教者には明らかに想像力の賜物が豊かに与えられています。それは彼らの雄弁と人々への感化力の賜物の一部となつていて、天賦の賜物です。ホイットフィールドは自由にその想像力を駆使し、ときには想像力がはみ出してしまうこともありました。あ

る日、彼がロンドンのハンティンドンにある伯爵夫人の家で説教したときの有名な出来事を見ましょう。聴衆は上流階級の人々でしたが、その中に有名なチェスターフィールド卿がいました。彼は未信者でしたが著名人に関心があり、特に上手な話には興味を持っていたので、ホイットフィールドの説教を聞きに行くよう勧められました。そのとき説教者は、星一つない真っ暗な夜に、危険な崖の道を行く男という有名な例話を聞いたのです。初め、この男は崖からかなり離れていましたが、少しずつそこに近づいて行きます。もしその崖から落ちたら死は間違いないありません。ホイットフィールドは、罪人がどんどん進んで、最後の審判と永遠の滅びの恐ろしい奈落に近づく様を例として語っていたのです。ありとあらゆる警告にもかかわらず罪人は、この哀れな男のように歩き続け、その深淵に近づいているのです。ホイットフィールドはしばらくの間、微に入り細にわたつてこの光景を描き出しました。とても劇的で想像力に富んでいたのです、その効果は著しく、ついにチェスターフィールド卿は飛び上がって叫びました。「たいへんだ。奴は滅んでしまった。」このことをどう言ったらいいでしょうか。ホイットフィールドは行き過ぎをしたのでしょうか。チェスターフィールド卿に影響を与えたのは何だったのでしょうか。ここが問題となる点です。

もう一つ実際にあつた話をします。十八世紀の終りから十九世紀の初めにかけてウェールズに一人の説教者がおりました。ロバート・ロバーツという名で、彼もこの想像力の賜物を与え

られていて、むしろホイットフィールドよりすぐれていました。ある日、彼はびっしりはいた礼拝堂で説教して、警告に心を留めない悪人——面白く生きて、きたるべき審判を無視している——に関する同じような要点を扱っていました。この点を強調するために彼は真に迫る例話を用いました。それは海岸に住む人たちが海辺を散策したときの話です。海の中に突き出た岩があり、岬のようになっていました。潮が引くと、その小さな岬の先端まで歩いて行くことができました。彼らは仰向けに横たわり日向ぼっこをしたり、まどろんだり本を読んだりしていましたが、潮がゆっくり引き返し、再び満ち始めたのに気づきませんでした。そのことには全然注意をしていなかったのです。しかし潮は岩の両側に寄せて来て、ゆっくりそれらを取り囲み、岬をも取り囲もうとしていたのです。説教者はこのことを写實的に發展させて、人々が「本心に立ち返り」、自分たちの状態を悟らせようとはしました。海岸からの警告を聞いて海辺に戻るのが充分残されていたのです。ロバートは想像力を駆使してこの例話を上手に仕上げたので、彼が、すぐに逃げると叫ぶ海岸の人々の警告と訴えを表現しようと大声を出したところ、ほんとうに会衆は立ち上がって、礼拝堂から出てしまったと記録されています。

以上のことはウェールズ人の氣質とか当時の人々が無知であったという説明では済まされません。この種の事柄は当時のアメリカやイギリスの天幕集会でもよく起き、その後もよくありました。チャールズ・G・フィニーの働きでも明らかに同じことが見られました。彼もまたた

いへん強い個性と想像力の持ち主でした。そのことがおそらく彼による回心者の多くに生じた事柄を説明しているように思われます。

以上の例は想像力の適切な利用と誤った利用とを分ける境界を確かに越えていると私は感じます。これらの話で人々に影響を与えたのは聖書の真理ではなく、ある場面の写實的な描写であり、力強くはあつても事によると念を入れ過ぎた説教者の想像力であつたかも知れません。同じことが映画や演劇を通しても行われます。ある冬の夜、演劇を見に行った婦人の話を覚えていてでしょうか。これは自動車が出現する以前の古い時代のことです。彼女の御者は彼女を馬車に乗せてそこへ連れて行きました。彼は二時間半、彼女がその劇を楽しんでいる間、御者台の上に座っていました。馬もながえの中にいました。劇場の中では彼女は泣き、その劇で演じられた気の毒な人々の苦悩に深く心動かされたのです。ところが演劇が終つて外に出たのですが、彼女は雪に覆われ、冷えきつて死になつていて哀れな御者を見ても全然心動かされることなく、自分の日常生活の一部と捉えたのです。ここが大事な点です。私たちを感動させるのは何でしょうか。言わんとするのは人々を感動させるのはみことばの真理であつて、私たちの想像力の所産ではないことを確かにするのが私たちの働きだということです。

ほかの多くの事柄でもそうですが、想像力を用いたためにまったく馬鹿げてこっけいになることがあります。知性の賜物が多くないのに想像力に富む説教者の場合には非常にこっけいに

なることがあります。まったくの偶然でしたが、私はある老説教者が語るのを聞きました。実に、次のようなことがあったのです。そのとき彼は放蕩息子のとえから説教しました。聖書にあるたとえの内容だけではこの説教者は満足できず、彼はそれに付け加えたのです。彼は想像力を働かせ、愚かな放蕩息子が我に返る以前の遠い地で、飢饉の中にいる状態を述べる段になったとき、愚の骨頂に達したのです。彼は放蕩息子のお金がなくなり、食べ物が底を尽き、落ちぶれてしまい、今や豚に食べさせるいなご豆さえ当てにしなければならなくなったことを指摘しました。しかし、そのいなご豆の供給も欠乏し、ついにはまったく途絶えてしまったとき、哀れな放蕩息子は空腹で絶望的であったが、豚もまた絶望的になったと言うのです。そしてひどい飢饉で凶暴になった豚はその息子のズボンを食べ始めたと言ったのです。

ここに至ってはみことばの真理は忘れ去られ、喜劇と言わないまでも私たちは空想の領域に置かれています。そこには自分の空想に捉えられた一人の人がいたのです。このようなことを決して許してはいけません。賜物として私たちに与えられているものはすべて、常にみことばの真理に従属するものです。再度私がこのことを言うのも、この点が真の説教者のだれもが続けなければならない最大の闘いの一つだと確信するからです。どこにその境界線を引くべきでしょうか。説教者は例証しようとする事柄よりも物語や想像した事柄のほうを楽しんでいるときは自分で分るのでから、そこで止めなければなりません。と言うのも私たちはただ人々に

影響を与え、感動させることに関心を持つのではなく、みことばの真理が人々に影響を与え、感動させることを望んでいるからです。



次の段落でもまったく同じことを述べなければなりません。それが説教における修辞法や雄弁術の立場だからです。これに関しても私が例証した人々や引用したほかの多くの人の場合、最大の価値を生む可能性があり、実際そうでしたが、やはり一線を越えてしまい、雄弁そのものに関心を持ち、みことばの真理それ自体より語る方法に関心が移ってしまい、聞く人々の魂より生み出す効果に多く関心をいざぐという大きな危険があるのです。もちろんこれは究極のところ自尊心の問題となるのです。

これに関する規則はあるのでしょうか。私が定めたいと思う唯一の規則は、だれも雄弁になろうと努めるべきではないということです。むしろ、これは説教者についてだからためらわず言うことです。政治家やそのほかの人々であれば、雄弁であろうとするのは当然良いことでしょうが、説教者の場合、決して雄弁になろうと努めてはいけなさと規定したいのです。しかし、すでに雄弁な人であるなら、それはそれで価値があり、神に用いられることです。私はもう一度偉大な使徒パウロの書簡に見られる彼の奔放な雄弁に言及したいのです。彼は決して文

学的傑作を生み出そうと工夫してはいません。文学的形式に関心をいだくこともなく、文学者ではなかったのです。しかし、ひとたびみことばの真理が彼を捉えるや、彼は非常に雄弁になつたのです。彼はコリントの人々が彼のことを「その話しぶりは、なっていない」と言つていると述べていますが、これはギリシヤの雄弁家の修辭的方法をパウロが好んで用いなかつたということ、彼が雄弁でなかつたことを意味するものではありません。彼の雄弁は常に自然で、必然性のある——決して工夫を凝らしたり、創作したり、形式ばつてはいない——ものでした。彼の心に開かれたみことばの真理とその思想の崇高さのゆえに、それは必然性のあるものとなつたのです。雄弁がそのようにして生み出されるのなら、それは真の説教の最上の僕だと言いたいのです。説教の歴史が何度もこのことを豊かに証明しています。

さて書き出したものであれ原稿を持たないものであれ、メッセージにおいて考えるべきさまざまな事項の中で、もう一つの点を取り扱います。それは説教におけるユーモアについてです。これもまたたいへん難しい問題です。この事柄が困難である点は、それが生来の賜物であることと、説教というこの偉大な働きにおいてこの生来の賜物の利用をどう位置づけるかが問題として提起されることです。説教と説教者の歴史を見ると非常に多様性のあることが分ります。スボルジョンのような際立つて偉大な説教者の場合、かなり多くのユーモアがありました——多過ぎると言う人もいます。メッセージの中のユーモアのことで彼のところへ苦情を言いに行

つた婦人について聞いたことがあるでしょう。彼女はスボルジョンの熱烈な賞賛者で、彼の説教から益するところすこぶる大きかつたのですが、ユーモアが多過ぎると感じたので彼にそう話したのです。スボルジョンはたいへん謙虚な人でしたから、次のように答えました。「そうですね、ご婦人。あなたのおっしゃる通りです。でも私がまだあなたに話していないジョークの数とあなたに語るのを控えたものの数を知つたら、今よりもっと私に信頼を寄せてくださるでしょうね。」私もその通りだつたと確信します。彼は生来ユーモラスな人で、それが彼の内面からほとばしり出たのです。しかし、スボルジョン自身模範とするホイットフィールドは決してユーモラスな人ではありませんでした。ホイットフィールドはいつも真面目でした。でも彼が生きた十八世紀のイギリスにはエバートンのジョン・バーリッジのような生来のユーモリストがいました。ただこれらの人のことで私がいつも頭を悩ましたのは、彼らには行き過ぎをする傾向があつて彼らのユーモアが羽目をはずしたことです。説教にユーモアの占める余地がないと言つつもりはありませんが、強調したい点はこの働きの性質上、また私たちの扱うみことばの真理の性格からして、あまり大きな場を占めてはならないことです。説教者は人々の魂とその運命を取り扱い、それに関心を持っています。しかも神と人との間に立ち、キリストの使節として行動するのです。熟慮の上述べますが、ユーモアはそれが自然な場合にのみ許容されるものです。ユーモラスになろうと努める人は忌むしく、決して講壇に立たせるべきで

はありません。同じことは会衆に取り入ろうと手の込んだ説教をする人にも適用されます。この類のことはいわゆる「職業的伝道者」には当然予期されることだと私はいつも心得ています。

以上の事柄はよく考慮されるべきで、無視してはいけません。補足的ではあっても大きな価値あるものとなりえますが、その用い方にはいつでも注意すべきです。しかし、退屈で生彩がなく、生気がなくなるほど過度にそれを抑制するのも注意しなければなりません。己を忘れ、悪魔を忘れないでいる限り、決して誤ることはないでしょう。

最後に述べることは、この時点では適當ではないのですが、メッセージの長さの事です。これについても私たちは機械的であったり、あまりかたくなになつてはいけません。メッセージの長さを決定する要素は何でしょうか。まず何と言ってもそれは説教者です。しかも時間はかなり相対的なものではないでしょうか。十分が一年に感じさせる人もいれば、一時間が二、三分のように過ぎる人もいます。これは私だけの意見ではなく、会衆もそう述べています。語る人によってこのように異なるので、どの説教者にも長さを一律に規定するのは愚かしいことです。メッセージの長さは題材によっても異なると思ふのです。短い時間で簡単に語れる事柄もあるので、私たちはいつでもそれに応じた取り扱いをすべきです。与えられた時間まで続けるために長引かせなければと感じてはいけません。また会衆によっても長さが異なります。すでに見たように、会衆自体の容量にはかなり大きな相違があります。ですから全般的な主題で、

会衆の立場に関して示したすべての特質を忘れないで、それを説教の長さを考慮する際にも取り入れなければなりません。もしこの事柄に関して口うるさい会衆であるなら、メッセージの長さはわずか十分くらいにしなければなりません。ところが、説教者はそんなタイプの「礼拝者」に心を留めてはいけません。でも自分で彼らの評価をすべきです。結果として彼らがある一定量以上の内容を受け取ることができないなら、その分だけ彼らに与えることです。それ以上は良くありません。これに失敗するならばあなたは悪い牧師、悪い説教者ということですよ。

メッセージの長さに関してこれ以上の規則があるのでしょうか。十分が途方もなく短いこととは言うまでもありません。一体、だれが真の説教の主題の一つを数分間で取り扱うことができるといえるのか。それはほんとうに不可能です。でもそうだからと言って一時間説教しなければならぬというのも間違いです。私はこのことを想像から述べているわけではありません。ともかく、私が懸念しているのはイギリスのピューリタンに対する新たな関心が生れ、一時間説教しなければ説教したことにならないと考える多くの若い説教者が出てきていることです。彼らにとつてそれは大問題でしょうが、それを行うことによつて自分自身とみことばの真理に大きな害を及ぼしているのです。それにしても一時間説教する理由がピューリタンがそのように行つたからだと言ふのですから、何と馬鹿げたことでしょうか。

説教の長さに関しては規則はありませんが、実際のところ私たちはこの長さの問題に関し

て、現在、一種の悪循環に陥っているように感じます。説教者は苦境に立たされているのです。つまり彼はいつも出席している人々をあまり長く話すことでつまづかせたくないと思っています。しかも彼は会衆が長いメッセージを好まず、メッセージが長過ぎると口にする事さえあるのを知っています。その結果メッセージをとめて短くしてしまうので、わざわざ説教を聞きに出かける価値がないと感じる人たちも出る始末です。しかし、今やこの悪循環に踏み込むべきときが到来したのです。機械的、習慣的に、あるいは自己義認のために出席している人々をつまづかせるかも知れませんが、そのような犠牲を払ってでもそれをしなければなりません。私たちは会衆だけではなく、よみがえられた主によって任命されているのですから、私たちの第一の関心事はみことばの真理とそれに対する人々の必要ということではなければなりません。第一に考えるべきことは時間のことではありません。人々にもそのように思わせてはならないのです。実際、人々を時間という束縛、この世の生活というものから解き放つのが説教者の働きの一部です。ですからみことばの真理とその使信とに時間的量の指示も受け、支配してもらいましょう。私たちは「主を恐れることを知っている」ので、真に「人々を説得でき」、「キリストのさばきの座に立つ」とき、「各自その肉体にあつてした行為を弁明」できるようにするのです。しかも正直に「キリストの愛が私たちを取り囲んでいる」と言えるなら、この事柄であればかの事柄であれ、大きく誤ることは決してないのです。

避けるべきこと

私たちはこれまでメッセージの準備と私たち自身の備えとに共通する事柄について考察してきました。

ところで、ある人たちには取るに足りないと思えるでしょうが、私には重要な問題がもう一つあります。それは説教題を事前に公表しておくべきかどうかということです。明らかに多くの人はそうすることを好んでいると思われまます。礼拝式を宣伝している教会の場合には特にそうで、題を公表することが習慣となっています。

しかし、これは私の承服できない慣例で、私は一度もそれを行ったことはありません。それには多くの理由があるからです。

まずその最大の理由は、会衆は神を礼拝するため、また神の真理のみことばの説き明かして、たとえそれが何であれ、どの局面や箇所からであれ、それを聞くために神の家に来るべきだからです。私たちが礼拝に出席するのもそのためで、それこそ私たちの心の最優位を占める